

T 02
N 69
29

日本における統計学の発展

第 29 卷

話し手 丸 山 博

聞き手 前 田 正 久



1980年9月21日(日), 9月22日(月)

丸山宅にて

29261

25261

ま え が き

1) この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合(A)によるもので、研究者は次の通りである。

江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行\*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜\*(代表者)、野沢正徳、広田純\*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎\*、三滙信邦\*、森博美\*、山元周行 (\* 推進係)

2) インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。その方々のお名前は、別巻を参照のこと。

3) この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。

4) この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。

5) 速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以 上

前田 先生、お暑いところ、お忙しい中をご無理なお願いに上がりまして、恐縮でございます。快くお引き受けいただきましてありがとうございます。

きのう、ちょっと簡単にいろんなことを伺い、資料を拝見、あるいは拝借さしていただいて、本当にありがとうございます。昨日午後から今朝にかけて一生懸命読みましたけれども、大変多量なので斜め、斜めで読ませてもらいました。できれば1週間も拝借して、読ませていただいてからのインタビューだと非常によかったかと思えますけれども-----。

丸山 それが一番よかったんだな。

前田 ちょっと時間切れて、予備知識不足のままでお伺いすることになります。

話の順序として、8月中旬からアメリカにいらしたそうで、私はあまりなじみのない会議の名前ですが、世界記録会議にコメンテーターとして呼ばれて、ご出席になったということですが、まず世界記録会議がどんな内容の会議で、先生はどんなコメントをされたのか。どんなスピーチがありましたか。おそらく先生の最近のご研究なり、長い間の業績をいったんまとめるに当って、かなり関係の深い会議じゃないかと、私も思っておりますので、その辺からひとつお話をご披露していただければありがたいと思います。

丸山 今度アメリカに呼ばれたのは、ユタ州の系図協会 (Special guests, The Genealogical Society of Utah) の招待なんだよ。それはオブリゲーションは何もなくて、今度の世界記録会議の模様を先生にぜひ見てほしいとい

う招待の条件なんだ。ほかに2人スピーカーがおられて、1人は平田欽逸博士、この方は自分の家系を戦国時代までさかのぼって調べられた報告、もう1人の方は藤木典生博士で、愛知県コロニーの発達障害研究所 (Institute for Developmental Research Aichi Prefectural Colony) の遺伝疫学部長をしておられる方の研究発表があったんです。

招待されたのは、私と丹羽基ニさんの2人です。この方は紋章、姓、地名の日本における研究家として、30年以上もやっておられる方です。

このワールド・コンファレンス・オン・レコーズ (World Conference on Records) は、8月の12日から15日までユタ州のソルトレーク市 (Salt Lake City) で開かれていて、集まったのが1万2000人といわれています。報告とか研究発表というのは、スピーカーが250~260人ですけれども、300ぐらいのセッションに分かれておりました。その中身は、パーソナル・ヒストリー (Personal History) とか、あるいはファミリー・ヒストリー (Family History) とか、これを日本語で簡単にいえば "先祖探し" というふうに、自分を中心にして親、じいさん、ばあさん……と、ずっとどこまでさかのぼれるかということ、具体的な仕事にしているわけです。

なぜそんなことをやるか。そうすると、なぜ系図を調べるかということになるんだが、それは聖徒イエス・キリスト教会の教義に由来してあるんです。普通これはモルモン教といわれていますけれども、私はモルモン教のことは何にも知らないし、アメリカのことも何にも知らない。それで現場に行って聞いた結果は、ユタ州は70%

がモルモン教徒だというんだ。ソルトレーク市は、教徒が60%だという。ですから、アメリカ開拓の歴史の中で、ユタ州あるいはソルトレークというところは、モルモン教徒にとってはまさに聖地です。

それでだんだんと関心が深まりまして、最近2冊の本（「末日教徒イエス・キリスト教会略史」）を読んだところですが、読んでよくわかったことと、現地において、その人たちの事業としての糸図協会の仕事を見ると、これがまさに第1次資料をつくり出して、あるいは探し出して、それを保存して、そしてそれを利用するということで、それにコンピュータとかマイクロフィルムを使う非常に大がかりな科学的な技術を駆使しているわけです。

その仕事の中身も見せていただいたんですけども、これなどは、私が戦後気がついて始めた研究を想起させます。というのは、今度の世界第2次大戦でたくさんの人たちが亡くなって、私などは、本当をいえばこの年まで生きているなどということとは、そのときには考えも及ばないことだったわけです。もう35年もたっちゃったが、戦後直ちに、私が教えておった保健婦学生に、過去帳の問題を話ししたことがあるが、それは大和国善照寺の過去帳で、1789年から1945年までの死亡者の年齢のわかるものについて時代分けをして、実際年齢階級別死亡数の分布図をつくった。（「過去帳の統計的利用の最も初歩的方法とその実例——死亡者の年齢について——」第42回日本民族衛生学会）同じようなことを、伊賀の大善寺の過去帳からもつくった。（「伊賀国大善寺の過去帳からみた1688年から1958年にわたる死亡者の年令について」）

この方法によると、明治以前の健康状態をもし寿命で

置きかえて観察できるとすれば、役に立つというので手がけた仕事が、私にあるわけです。それは過去帳の統計利用が、われわれの健康指標として、ヒストリカル・デモグラフィの最も初歩的な、最も利用しやすい材料として、日本では古くからあるからそれを使おうというので、これを日本民族衛生学会の過去帳研究委員会で提案をしたりしてきた。日本民族衛生学会で過去帳研究委員会が設置を承認されたのが、1964年（昭和40年）です。いまにしてやらないと、資料がどんどん散逸してしまうので、どうしてもこういう仕事をやらなきゃいけないというので始めたわけです。

1960年段階、昭和35年の第25回日本民族衛生学会のときに、大きくクローズアップされて、それからの仕事です。その後、私たちの過去帳研究委員会の仕事が、順調にはなくて、非常に特殊な研究努力によっていままで続いてきておる。その研究内容が世界系図協会に注目をされたことが、後でわかったわけです。これが私たちが招かれた大きな理由ですね。

その資料に関しては、「過去帳による江戸中期から現代に至る山梨峡東農村住民死因の疫学的観察」という中沢忠雄さんたちの仕事が、1977年に発表されております。その前には、飛弾の高山の須田圭三さんの往還寺の過去帳の研究という非常に緻密な、それこそジョン・グラントばりの研究が発表されております。

こういうものが、統計学との関連でどういう位置づけをされるかということについても、私たちは歴史学と統計学、また医学の境界領域という点で、なるべく早い時期に資料を整理しておかないと、後になってでは間に合

わないからということで、いまもやっているわけです。いまは単なる過去帳だけじゃなくて、過去帳に類似するものによるという意味で、歴史人口研究という名称で、われわれの研究活動を進めております。1976年9月号の日本民族衛生学会に、松田武君と私とでわれわれの課題の回顧と展望を載せておりますから、それをお読みいただければ、私たちの意のあるところがある程度わかっていたいただけると思います。

前田君との関係でなじみの深い渡辺定さんなどは、この問題については寿命の研究、菱沼従尹君の研究、こういうものは新しいところだし、現代的、未来的な問題に非常にかかわっておるわけです。

今度の会議は第2回で、1969年が第1回なんです。これがアメリカにおいて特に問題になるというのは、あそこには開拓者がアメリカ以外のところから来られておる。その来方が、奴隷売買のような形で強制的に連れてこられたという方もおるわけですね。それで「ルーツ」で有名なアレックス・ヘイリーもこの会議に出て、大ホールで自分が「ルーツ」を書くに至った経過などについて講演されました。

日本のような場合でしたら、戸籍簿が外国に比べたら非常に完備しておる。それは現在もそうだけれども、昔からお寺の菩提寺というのに組織されていますから、日本におけるわれわれの研究は、ある意味では、ヒストリカル・デモグラフィ（歴史人口学）的研究において、世界的な問題提起、あるいは事実解明の非常に基礎的な資料を提供できるんじゃないかという私の予想が、今度行ってみると、こういうところではあまりに具体的に進

行している。日本では少数の私たちのグループ程度だけれども、向こうでは1万人もの多くの人たちが集まるんですからね。ですから、この問題について、日本ではどういうことになるか。

このときに、私が昔、伊賀の大善寺で調査を一緒にやった西沢進君というのが——これは22年前に日本民族衛生学会で過去帳から見た人口動態の発表をしました。彼がいま新聞記者をしておるものだから、「行かぬか」といって連れていったんです。それが「夕刊フジ」の9月5日に載っています。彼も非常に幸せなことに社命で行くことができた。ここに「酒もタバコもコーヒーも無用」という記事で、彼の今度のソルトレーク市の10日間を克明に彼は記録しておるから、一遍それをまとめてみたらどうだと、彼に話をしておるんです。

それよりももっと私の驚いたことは、その結果なんです。彼の菩提寺の過去帳をマイクロフィルムに撮って、ソルトレーク市のいま申し上げたマイクロフィルムを保存するところに、今回持っていった。村の人たちに、22年前にやった仕事が、いま世界のヒノキ舞台に乗ったというので、彼も面目を施すし、今度は帰ってきて、ここは200年以上の古い家がたくさんあるところなんで……。

前田 それは正確にいうと何県何郡何町ですか。

丸山 三重県伊賀郡の大善寺ですね。それで村の衆も、彼の帰ってきた歓迎会の後、新しく、もっと詳しく、自分たちの仏壇の中の過去帳を1軒1軒調べたんだ。その前にも彼にいうて、その土地の土地台帳であるとか、水路、道路、あるいは経済統計の基礎になるような第1次資料を集めたりしたことがあったけれども、今度は1軒

ノ軒の人たちが本気になり出した。

その結果、どういうことが起きたかということ、権太息子が、学校の先生や家族からどうしてこんなに人間が変わったかと思われるくらい、急に変わってよかった。それは、子どもが自分というものを先祖との結びつきで発見したということ、権太息子がまじめになっちゃったんだよ。これはえらいことだと思うんだ。学校の先生もびっくりしているという。だれもその権太を直そうとかどうとかいって指導したわけじゃない。その息子自身が、いまの先祖探しの問題でこつ然として変わっちゃったわけだね。これなどはわれわれの全く予想しなかったことなんだけれども、やはり宗教的な問題というのは、そんなところに強制されない人間の変革というのがあるんじゃないだろうか。

そういうことで、私がいうておる先祖探しという仕事が、単に形式的な、統計的な意味だけでなしに、やはりモルモン教徒の大きな仕事としてやられていることの宗教的な意味がある。そのモルモン教の中身のことや、なぜ家系を調べるかというようなことを書いた物を読んでも、ぼくにはまだよくわからぬが、いま申し上げたようなことが起きたという事実を見ると、やはり後ろ向きに過去を探索することの中に、未来の栄光というか、人間性の開発というか、そういうものがあるんじゃないだろうかという気がしたことが、今度の一番思わざる大きな収穫だったと思いますね。

これは話が統計とはちょっと外れますけれども、私が乳児死亡統計をやっていることも、ただ単に赤ん坊の死んだ数を勘定することにすぎないけれども、その意味は、

やはりこういうところにも通ずるのだろうと、他人様にわかってもらえたら、私自身の長い間の統計的な研究の意味も、わかっていただけるんじゃないかという気がするんだね。

前田 先生に拝借して読ましていただいた「医療社会化の道標」の中で、先生ご自身の「岸和田の乳児死亡調査をめぐって」という、これもやっぱりインタビューか何かですね。

丸山 これは川上武君がばくにインタビューしたときの記録を活字にしたものです。

前田 これを読ましていただくと、先生がどうして統計の分野にも足を踏み入れられたかということが、およそわかりますけれども、この辺のところを、この本で落ちているところもあるかもしれませんし、少しお話しただければ-----。

先生は、だいたいあちこち、広島から新潟、仙台、静岡、東京、大阪と移り住んでおられますが。

丸山 そのときに、私を感じたことだけれども、私は、日本人だから日本語をしゃべっていたつもりだった。ところが、広島から新潟へ行ったときには、私たちの日本語は通じなかったものね。私の言うのは相手にはわかるけれども、新潟土着の人たちの言う日本語はわからなかった。泣きの涙だったよ。

前田 「異邦人のような感じがした」と書いてありますね。言葉というのは、同じ国内でもやはりそれくらい障害になりますか。

丸山 だって、事実そういう体験を私はしたものだか

ら、私は、数字の統計というものが、数字ぎらいの人にとっては、役に立たないんじゃないかと思う。あるいはそれによって錯覚を与えたり、統計の目的とする内容が誤まって伝わる可能性は十二分にある。それについて統計学的な教育とか、あるいは統計学そのものについて、一般大衆と学者との間の関連とか、あるいは官庁における統計調査の問題だとかいうのは、もっともっと考えられてしかるべきだと思いますね。

前田 先生は、阪大に入学される前に上智大学で哲学科を1年おやりになって、それから阪大の医学部に移られていますけれども、ここで私どもがお名前しか存じ上げないいろんな先生のお名前が出てきたり、最終的には小島勝治の業績を忘れてはならぬよと先生はおっしゃっておられますし-----。

丸山 それは統計学に限定しての話ね。有名な人は忘れられないし、覚えられているかもしらぬけれども、小島勝治のような人は、30歳にして戦争で部隊が全滅したために、全然わからないわけね。引き揚げた部隊についてその後いろいろ調べたけれども、結論は、何か大洪水があって部隊が全滅したんでということですから、わからぬのです。

前田 先生のご経歴を拝見すると、梶原三郎先生のご紹介で、高野岩三郎先生、森戸辰男先生、それから小倉金之助先生というお名前が出てくるんですが、一番どの先生について-----。

丸山 私はそこにも書いてあるし、現在も生きておられる梶原先生があって、私の現在がある。親があって私の肉体があると同様に、私の学問的、社会的なものすべて

ては、梶原先生があって私がいまあると信ずるぐらい、梶原先生の影響力は大きいです。というのは、梶原先生がフランスから帰られて、第2年目の講義のときに、私たちは受講したわけです。そのときからですからね。

前田 それは、何年ごろになりますか。先生は阪大にお入りになったのが……。

丸山 昭和6年でしょう。だから、7~8年ごろじゃないですか。先生とのつながりは、それからずっとですから。そして私が、私の学問の道、衛生学の道に入ったのは、石原修先生もおられましたけれども、梶原先生の人柄ですよ。

梶原先生が、私に最初に読めといわれた本が、小倉金之助先生の「統計的研究法」なんです。「統計的研究法」の材料は、当時大阪医科大学の予科の数学の先生としての小倉金之助先生のお仕事が中心ですね。

それから高野岩三郎先生や、まだ生きておられる森戸辰男先生などにお目にかかって、婦人問題だとか、労働問題だとか、統計学の問題だとかに、目を開いていただいたわけです。

「統計学古典選集」の出たのは、そのころですね。あれが私の統計学の独習書。

前田 ただ、最初に出た「統計学古典選集」には、ジュースミルヒとかケトレイが漏れていたんで、先生がおかしいじゃないかというようなお話で……。

丸山 欲しいから、ぜひ出してほしいということをはがきに書いて出したら、「月報」に載った。そして戦後になってやっと、ジュースミルヒは昭和24年に出版されましたね。ケトレイの方は、すでに岩波文庫でも出ていまし

た。

前田 「医療社会化の道標」を読ましていただくと、「それは渡辺<sup>ひなし</sup>熙（松園）先生の昭和九年の死が決定的でした。」というくだりがあるんですけども。

丸山 それは医者として、いまもそうだろうけれども、医学校で勉強した当時、漢方医学というのは全然取り入れられていない。西洋医学だけです。その先生は、東大の有名な入沢達吉先生なんかの時代の卒業生ですけども、彼は本科でなくて別科の卒業生です。しかし、先生はドイツに留学されて、ドイツで学位を取られたんです。

先生の研究については、私は何回か書いていますが、非常に卓抜した社会医学者だったんですよ。工場医の時代にも実にすばらしい論文を書かれていて、私は先生が筆で書いた原稿を没後、資料整理のとき初めて拝見したんで、それを活字にして世の中に出しました。それが「日本科学技術史大系第24巻」に出ている「紡績工業ニ於ケル寄宿舎女工ノ衛生経済」です。

その先生が、現代的な、日本の主流である西洋医学、科学的医学をやって、大きな病院の院長なんかをなさ、たにもかかわらず、漢方医者になっちゃったんですね。

『東洋医学研究会』を起こされて、孤軍奮闘して勉強された。そして70ぐらいで亡くなられました。その晩年に、私は大阪で先生を訪ねあてることができて、「素問」や「傷寒論」の話なんか聞いたり、いろいろとお話を伺った。

そのときのことは「ある老医師の死」と題した小文に書きましたが、それは亡くなったときの1週間ぐらい前でしたか、私はまだ20代ですし、先生と50年くらい違うわけですね。医学生、あるいは医学を学ぶ者の考え方などに

ついて話されたんです。

それで亡くなられちゃったものですから、何しろ漢方医学なんというのは学校がないですから、教える組織がないでしょう。その渡辺熙先生のところで偶然お目にかかったのが、桜沢如一先生です。この方は、私を現在あらしめた梶原先生の影響力と同じように、私の健康問題それ自体について、決定的な役割りを果たしていただいた先生です。それは「食品公害論」の終りの方に、「食禍を防ぐために——西周と桜沢如一を憶う——」というのを載せてあります。

私の乳児死亡の研究の意味というものを、専門家以外で桜沢先生ほどわかっていただけた方はなかったですね。専門家は別ですけれども。そのことについては、私の「乳児死亡研究ノート第4冊——各国民族人口消長の予測法として——第一次世界大戦から第二次世界大戦までの世界列国乳児死亡統計の意義」という論文並びに統計表を、戦時中ですけれども、桜沢先生は、編集、印刷、校正、出版を全部してくださったんです。これは館稔さんのところの人口問題研究会から出すつもりで、館さんに預けてあったんですけれども、あの当時の出版事情では人口問題研究会でもとても出せなかった。というのは、「人口問題」の刊行が不定期になってしまったんです。

そのときの桜沢先生の紹介が、私の「乳児死亡」に出ています。これは昭和19年11月3日の日付で、私の乳児死亡研究の意義というものを、簡単にいえば5つばかり指摘されているんです。

「1. 乳児死亡類型の確立

2. 乳児死亡による20年後の健康なる壮丁の数の予

測

3. 乳児死亡の原因としての母性の食生活
4. 一般国民食生活指導の重要性
5. その結果としての食糧政策の重要な性格」

前田 それは先生がお書きになった論文の柱ですか。

丸山 そう。論文というよりも、私のつくった統計表よ。あの統計表は世界のそういうことを教えてくれるわけです。

前田 先生はすでにそのときに、食糧危機の問題をそこでいっておられるわけですか。いまいわれておる世界における人口増加爆発-----。

丸山 そうそう。要するに乳児死亡問題でも、人口問題でも、いつでも問題になるとときには、量的の問題が先なのです。ですから、統計的、数量的な問題が、先に問題になる。次に、質的な問題が問題になる。食糧問題というのは、当時は量的な問題だったわけですね。いまは量的もさることながら、質的に非常に悪くなっているんです。いわゆる食品公害問題です。

ですから、現実的な課題としては、すでに戦前から引き続いて、いま日本が当面している世界的な食糧的危機ですね。大豆なんというの、戦争前は満州でしょう。戦後は全部アメリカですね。米だけでしょう。あと農産物は全部外国依存です。そして今度は、食品が加工されて工業生産になっちゃったわけだね。卵だって、本当の卵じゃありませんもの。そういうような名前は昔の名前だけれども、実質とは違っておるということなんですよ。

そういう意味で、統計という名において呼ばれている内容についても、われわれから見ると、いろんなとんち

んかんなことがいわれたりしているね。

前田 先生がいまおっしゃったように、たとえば表現として同じ用語であっても、用語の中身が違ってきますから、時系列にながめるときには、その辺をしっかりとかがめていかないと、ただ、表現が同じだからということではなく、と時系列的にとっていくと、とんでもない過ちをおかすということ、気がつかないやいなぬということですね。

丸山 そうですね。

前田 さっきお話になった梶原先生のご紹介で、小倉金之助先生の「統計的研究法」をお読みになって、統計的な手法を-----。

丸山 あれが私の一番初めです。

前田 それから高野岩三郎先生、森戸辰男先生の-----。

丸山 それから「社会統計学研究」だとか。

前田 いわゆる「統計学古典選集」で勉強されながら、ときどき高野先生、あるいは森戸先生にお目にかかった。このご本(「医療社会化の道標」)を見ると、そのころは、社会科学的なことを勉強したければ、労働学校へ来て勉強せいということで、通ったと書いておられますが、高野先生、森戸先生は、当時は-----。

丸山 高野先生は、大原社会問題研究所の所長だよ。森戸先生は所員だ。その先生たちが大阪労働学校を経営しておられたわけだ。それはたしか四貫島の方だったと思います。労働学校が閉鎖される最後の2期、ぼくは夜学へ行きました。

前田 先生は、一応労働学校卒業ということになるんで

すか。

丸山 そうでしょうね。そんなの、いまの学校制度がおかしいよ。学校は勉強するところなんだよ。入ったら出るのがあたりまえなんだが。あるいは落伍すれば中退ということになるのか、どういうことになるのかね。

そこで夜学ですから、勉強しておる労働者の姿を見たり、それからわれわれがいままで大学で教わらなかったような社会科学の分野の講義を、森戸先生や、他の先生たちから聞いたんです。

前田 そのほか、先生のご年配、あるいは先生よりもお年寄りの方々に、当時関西におられたとすれば、たとえば蜷川虎三先生とか、杉栄先生。

丸山 それらはまだ若い方よ。もっと年寄りがいるね。蜷川先生の先生、財部静治先生は酒がお好きで、先生のお宅をお訪ねしたとき、玄関を入ったら、大きな声で「丸山博君来る」といって歓迎のあいさつよ。お話を伺ったり、お酒をごちそうになったりしたあげく、その帰りに「君にこれを上げる」といって下すたのが、日本で最初のライフテーブルです。そのときにバリバリと本の中のページを破いちゃうの。「先生、破かなくてもいいじゃないですか」といった。ところが、そこには財部先生に謹呈するという矢野恒太のサインがあるわけ。こんな大きな本。

前田 それが、第一生命の「第1回国民生命表」ですね。

丸山 そうそう。あれを私は財部先生からもらった。

前田 あれは正しくは「生命表」という名前じゃないですね。「何とか研究」という名前で、一番最初はオフィシャルじゃないですね。ところが、その後つくったときに、

年次的にいうとあれを第1回にせざるを得ないので、後からあれは「第1回国民生命表」というふうになったんですね。

丸山 そうですか。

前田 財部先生は、当時どちらに所属-----。

丸山 京都大学の経済学部の教授よ。そのときは、蜷川さんは助教授だったかな。それから京都大学では汐見三郎先生、同志社では宗藤圭三先生、関西学院では田村市郎先生、神戸商大では水谷一雄先生。

前田 汐見三郎先生は、教授をやっておられた。

丸山 もちろん。経済学部です。その先生にちが、大阪で関西の統計学者の研究会を、月例かどうか忘れたけれども、しばしば開いておられたんです。当時、御堂筋のガスビルの学士会館で、そこへ私たちは参加させていただいて-----。

前田 水谷先生は、神戸高商といった時代ですね。蜷川先生は、この先生方の後輩に当たられるんですね。

丸山 だって、財部先生が教授だから。だから、大学の教授と助教授と助手とを、役所の高等官や判任官や雇いというように区別して、能力をどうこうするのは、私はおかしいと思うね。そんなことは書かなくたっていいけれども。(笑)

丸山 たまたまそういうことになっているというぐらいですか。しかし蜷川先生が財部先生の後輩であられたことは事実、私はあんまり詳しいこと知らぬが、蜷川さんには、「利用者の統計学研究」とかそんな本があるな。このことは大橋隆憲君に聞くか、要するに蜷川統計学派の諸君に聞いた方がいいよ。私の記憶違いがあるかもしれ

ねから。それは社会統計学派ですよ。

前田 いま先生が、社会統計学派だとか、この先生は京都系の先生だというふうにおっしゃったんだけど、この当時の先生方をもしそういう系列的に分けますと、どういうふうになりますか。

丸山 東京大学から来られた大原社研の高野岩三郎先生の統計学古典選集を翻訳された方たち、だから大原社研の流れがあるんですよ。それから東京商大の藤本幸太郎先生の流れ、財部先生の京都学派。財部先生にも、高野先生にも、藤本先生にも、私自身はいろんな意味で影響を受けましたね。

前田 私はこの辺のこと、よくわかりませんが、大づかみに……。

丸山 藤本先生の場合は、私は恐縮しちゃったよ。財部先生の場合はさっきいったそういうことでしょう。

高野先生の場合には、東京に行って、こたつに入って先生といろいろな話をした。大原研究所が東京に移転して、砧かな、寒い土蔵みたいな家だったな。森戸先生のところにもずいぶんお邪魔して、いろいろ教わった。

それから藤本先生の場合には、統計学社の「統計学雑誌」の仕事をずっとやっておられたとき、昭和14年10月の640号に、私の「乳児死亡研究ノート」の1から全部転載をさしてくれと直接いわれた。これには私もびっくりしましたね。120ページに出ていますが、

「おことはり）本稿はかつて『乳幼児研究』に連載されたものであるが特に筆者に乞ふて本誌に転載のお許しを得たものである。」

なんていう紹介で、ずっと出たんです。何といたって

これは「赤本」でしょう。有名ですよ。当時、「統計集誌」(東京統計協会刊行「青本」青表紙)と「統計学雑誌」(「赤本」赤表紙)ですから。

それから大阪の場合には「浪華の鏡」(白表紙)というのが、これまた当時の地方官庁の統計家の機関誌ですね。これは非常に水準の高いものだったです。

「統計学雑誌」も、日本的な古い歴史のある雑誌でしょう。それに私の「乳幼児研究」に書いた論文を転載してくれといわれたんで驚きましたね。このごろは、転載をするような雑誌は権威がないなんていっているでしょう。そうじゃなくて分野が違えば、私の論文は「乳幼児研究」ですから、ところがそれは乳児死亡統計ですから、そっちに転載することにやぶさかでないという大らかな、統計学者としての先生の度量の広さ、私はそこで感激しましたね。

前田 それは、主として先生の助手時代のご研究ですね。

丸山 これは昭和14年でしょうね。何しろ私の研究というのは、昭和10年から15年の間ですから。それで昭和11年から書きかけて、こんなものができたんだ。(「ニュージ シボウリツ ヲ ヒクメル タメ エノ ノ ヒント」『カタカナ ジダイ』昭和13年11月)友達が私の乳児死亡の最初の論文を、かたかなに翻訳してくれた。そのもとは「乳児死亡率減少策への一示唆」昭和11年3月11日、これが、私の自分の研究を最初に活字にしてもらったものですよ。それから「乳児死亡研究ノート」にずっと出ている。

前田 それでいまの藤本幸太郎先生のあれで恐縮されたというのは、このうちのどれなんですか。

丸山 これ(「乳児死亡研究ノート」(その1))全部ですよ。これはたしか1年間連載したんです。このときは、私はこればかり書いておいたから。この「乳児死亡研究ノート」は、「乳幼児問題研究資料第一輯」というので、大阪乳幼児保護協会の大久保直穆先生が、こういうふうによりまとめて出したらよいというので、その趣旨が最初のページに書いてあります。

前田 皇紀紀元二千六百年記念事業と-----。

丸山 抜き刷りのときに、高野先生だとか、森戸先生だとか、先ほど名前を挙げた藤本先生、水谷先生、宗藤先生、田村先生、そういうところにご批判を仰ぐべくそれを送ったわけですよ。そうしたら、藤本先生がそれを読んで、載せさせてくれといわれたんで、びっくり仰天したわけでした。

前田 さっき先生がおっしゃった、それほど明確な流れではないのかもしらぬけれども、一応高野先生は大原社研の流れ、藤本先生の東京商大の流れ、財部先生の京都学派、それぞれどんな点が違ったわけでしょうか。

丸山 それはさっきもいったように大学だから、教育された後続部隊の若手諸君の仕事ぶりが、私には何とはなしに———どうといわれたら、そんなにはっきり色分けができるわけでもないけれども。

先だっても話したけれども、東京商大の杉本栄一先生なんというのは、ぼくら注目したね。

前田 杉本栄一先生は、どういうお仕事を-----。

丸山 むろん「経済原論」ですよ。若くて逝くなられたのは惜しかったね。

日本の統計学界というのは、経済学者が主流なんだよ。

それでわれわれが統計学を勉強したのは、有澤広巳先生の本（改造社版「経済学全集の統計学（上）（下）」）だとかそういうものです。有澤先生の先生は、高野先生じゃないの。結局、小倉先生のような方は数学者ですが、あとの統計学界の先ほどから名前を挙げている先生方は、経済学者です。

われわれは、本来は衛生学者ですから、そうすると必然的にバイタル・スタティスティックが基礎になるわけですね。バイタル・スタティスティックといえは、当然生物統計とか、医学統計とか、衛生統計とかということになるわけですね。

その問題について、これから話がそっちに行くだろうと思うけれども、要するにメーディチェシェン・スタティスティック（Medizinischen Statistik）とか、モラル・スタティスティックという問題が、1800年代に出てくるわけですよ。そのことは、結局グランドや、ペテイヤ、ジュースマルヒは、そういう統計的な手法を方法論としてつくり上げた人たちで、そういう統計的な研究方法についての学問的な歴史は、「古典選集」を読めばよくわかるわけですよ。

日本において、われわれが衛生統計とか医学統計を勉強しようと思えば、プリンチングの本（「Hdb. der med. Statistik」）だとか、当時一番新しかったのは、A・B・ヒルの「プリンシプル・オブ・メディカル・スタティスティック」ですよ。これは翻訳をしたし、後に私が東京に行ってから、再版されたA・B・ヒルのあの本をみんなで翻訳して、曾田長宗先生の還暦の祝いか何かのときに出そうというてや、たんだけれども、とうとう出版

できなかつたね。全部翻訳したんですよ。そういう仕事も、私は厚生省の統計調査部の業務だとさえあの当時思っていたよ。けれども、そういうことは、その後も全然聞かないな。あれは原稿残っているはずよ。

前田 そうですか。どこにあるんでしょうね。

丸山 それは、曾田さんのところに。

前田 いま先生がたまたまお触れになりましたけれども、モラル・スタティスティックとか、その辺のことを少しお聞かせくださいませか。そうすると、そこに有名な森鷗外先生のお名前も出てきましようし、またそういう文献に絡んで、小島勝治のお話が出てくるかもしれませし、杉栄先生も-----。

丸山 その当時の仲間で、杉栄、そのほかもたくさんいた。「社会統計研究会」をつくったが、戦争中だったから、杉さんは戦争行っちゃって、すぐ死んじゃうし、小島も後で行っちゃって死んじゃうし、われわれの研究仲間が戦争に引っぱられて、たくさん死んでしまったんだよ。ぼくなんてのは、生き残ったんだね。これが戦地からの手紙です。

前田 小島勝治さんからの。

丸山 こんなきれいな字だよ。

前田 小島さんという人は、ずいぶん筆まめな人だったんですね。

丸山 筆まめもいいところだ。この日記帳を見てごらん。

前田 これは直筆ですか。

丸山 そうです。そんなのが出版できるくらいならば、大したものだ。

前田 小島さんは、これを書かれたとき一体お幾つなんですか。

丸山 そのときは二十幾つよ。

こういう人がわれわれの仲間におったということも、皆さん、あまり知らな過ぎるんだ。私は、彼との交渉わずか1年もないんじゃないかな。一番長いのは松野竹雄ですよ。

前田 そのころ、松野さんと小島さんはどういう関係で、どこにおられたんですか。

丸山 松野君は大阪府の統計課、小島君は「浪華の鏡」の)読者で、布施市(いまの東大阪市)の吏員、統計係だ。

それで私は、彼が亡くなったから、何とかして彼の残したものを世に出したいと思って、松野と一生懸命や、たんた。とりあえず「日本統計文化史序説」が出たわけだ。ことしあたり、第2巻が出る運びになっているんだけれども、まだ出ないね。要するに彼は地方の統計職員ですよ。

前田 まだ家庭をお持ちじゃなかったんですか。

丸山 独身だった。23歳から27歳ぐらいまでかな。あとは戦争に行っちゃって、30歳でさっきいったような部隊全滅だ。

前田 じゃ、統計の仕事は本当にわずか4~5年なんですかね。

丸山 6年ぐらいでしょうね。昭和12年から17年。

前田 しかし、その間に、若い人がこれだけの業績を残したというのはすごいですね。

丸山 だから、どうしてそれを日本の統計学界は問題に

しないかというので、私は何とかそれを世の中に出したいと思って、松野と一生懸命やった。このときに、上原専禄先生にお世話になった。

私の「乳児死亡(II)統計の研究」の181ページに、彼の戦地からのはがき8枚(昭和18年7月3日受信のナンバー124から131まで、軍事郵便はがき)を記念として載せたけれども、「丸山博君の『日本邦乳児死亡統計40年』を観る」)このように日本統計史の研究を宿題としてやった仕事を、藤本幸太郎先生あたりのご好意で、文部省の出版助成申請などもした。それはついに成功しなかったけれども、「日本統計文化史序説」が出たのは、上原専禄先生のおかげですよ。私は上原専禄先生にはずいぶんお世話になりましたよ。最後は、世間的に言えば非常に不幸な結果になりましたけれども、偉い先生でしたね。

前田 (小島さんは)この若さで実務をやりながら……。

丸山 そうです。普通の吏員ですよ。

前田 たとえば数学科を出したとか……。

丸山 そんなことはないです。だから、統計をやるのに、数学科を出なければできないんじゃないのよ。歴史科を出なければ、歴史がやれないんじゃないんだよ。私なんか、あるときにはスタティスティシャンだと思われていて、医者だと思われていなかった時代もあるもの。私は、統計学の講義を受けたわけでもないよ。まず医学校で衛生統計とか医学統計とか、統計学を教えている先生は、当時いなかったんじゃないの。

川上理一先生だとか、九大の水島治夫先生だとか、いまの東京女子医大の学長の吉岡博人先生だとか、ああいう方は皆衛生学者で、研究方法論としての統計学を教え

ていたわけだもの。私たちも、衛生学の方法論としての統計学をやっているわけだから、統計学会に、医学分野の人やら生物学分野の人は少ないでしょう。いま厚生省の統計調査部に、医者は何人ぐらいいるの？

前田 せいぜい4人か5人ですね。一時期は多くおりましたけれども。

前田 小島勝治の問題も、後でいろいろ述べていただくときもありましようけれども、モラルの問題と、当然そこに森鳴外先生のお名前が出てくる。先生は最近統計学会で、森林太郎の業績その他の発表をされましたが、その辺のところを少しお話してください。

丸山 鳴外は、明治22年2月23日「東京医事新誌第五百六十九号」の緒論の中に、「医学統計論の題言」というのを書いています。これを教えてもらって読んだのが、森鳴外との取り組みの初めよ。これを読んで、ぼくはびっくりしたね。これは吳秀三が医科大学生で、彼がエステルレン(Oesterlen)の「医学統計論(Handbuch der medizinischen Statistik)」の翻訳をして、その序文を森林太郎が書いたわけよ。

ところが、それを調べていくと、鳴外の統計論争というのは有名だけれども、この「医学統計論の題言」そのものが、私たちにどんなに重要な意味を持っているかということについては、だれもあまりいわないね。それがまだ30歳にもならない軍医、大尉ぐらいか、ヨーロッパから帰ってきたばかりの鳴外が、こんなことをいうのを読んで、私は、彼がすばらしい学識を持っていることがわかったわけだね。

それじゃ、だれか鳴外のことで詳しく調べておられたら教えていただきたいと思って、いろんな方にお目にかかったら、結局だれもやっていないことがわかったわけよ。そういう問題意識をほかの方たちは持っておられないことがわかったわけだ。結局、言い出しべの自分がやらなければならないような状況になっちゃった。それで結局、衛生学の中で占める医学統計に、森林太郎の「医学統計論の題言」によって、われわれは非常に大きくショックを受けたわけです。明治22年ですから。

そのエステルレンのオリジナルを見ると、私たちはプリンチングのメーディチェシェン・スタティステークのハンドブック (Handbuch der Medizinischen Statistik) で勉強したんだけど、うかつだったが、その序文にエステルレンのことが書いてあるんだね。だから、その当時——いまはドイツ系統のハンドブックがどうなっているか知りませんが、エッチング (Oethingen) の本は、モラル・スタティステーク (moral statistik) と書いてあるんだよ。そしてエステルレンの前までさかのぼっていくと、メーディチェシェン・スタティステークということじゃなくて、モラル・スタティステークという分野になっちゃうわけよ。モラル・スタティステークの中に、バイタル・スタティスティックなんかがある。そうすると、われわれがモラルという内容が、日本語における道徳と違うんじゃないだろうかというので、まだ私自身はこれが納得のいくところまで来ていないんだ。

そんなことをやっているうちに、杉亨二先生たちや、西周先生とか、長興専齋先生だとか、いろんな分野で明

治の近代化の大立物たちが出てくるわけだ。そうすると  
 鳴外だとか呉秀三だとかいうのは医学畑、長與先生はも  
 ちろんのこと、日本の100年の近代医学の発達途上にお  
 けるそういう人たちのいろんな業績の中で、医者学で統  
 計の問題についてこれぐらい造詣の深い鳴外のことを、  
 どうしても自分が納得いくまでもっとも、とやらなきゃ  
 ならぬ羽目になっちゃって、深入りしちゃっているわけ  
 ですよ。

森林太郎の問題について、ぼくはいつから始めたのか  
 というと、昭和38年(1963年)だね。このときに大阪で、  
 第16回日本医学会総会があったんですよ。その前に、鳴  
 外関係の勉強に頭を突っ込むようになりましたね。その  
 ことは、一方、日本の近代医学、あるいは衛生学、衛生  
 行政、要するに保健問題についての科学的な取り組みと  
 いうことの歴史的な研究に、当然ならざるを得ないわけ  
 ですね。

それは私が阪大に来て、最初に、大学というのは研究  
 をすることはあたりまえのことであって、もし大学でし  
 なかったらば研究するところがないんだ。しかし、教育  
 をするところであることも事実なんだが、どちらを大事  
 にするかというと、いまの医学教育の現状からいえば、  
 先ほど来問題になっている方法論としての統計学も必要  
 だけれども、それ以上に、医学の歴史についての目をも  
 っともっと開かなきゃいけない。われわれはあまりに無  
 知過ぎるというので、かねがね富士川游先生あたりの仕  
 事などを読んでいたものですから、「医学史研究会」とい  
 うのをおこしたわけね。

前田 医学史研究会は何年からスタートしたことになる

んですか。

丸山 これは1960年でしょう。機関誌の出たのは1961年（昭和36年）ですね。その前の1年間は基礎づくりで、「医学史通信」が出ています。私が阪大に行ったのが昭和33年（1958年）だから。

前田 その医学史研究会の主なスタッフは、どういう先生方なんですか。

丸山 これは幸いなことに、阪大衛生学教室では、医者でない、医学出身でない野村拓君だとか、松田武君、あるいは医学出身では「医学概論」の中川米造君、山城正之君だとか、そのころ教室に入った若い諸君が中心になってやってくれたんだ。

前田 先生、いま医学でないとおっしゃったのは、衛生学でないとという意味でおっしゃったわけですか。私はまた、医学、衛生学分野以外の、たとえば社会学者だとか、そういう人たちも参加をしたかと思って……。

丸山 そういう人たちも参加をした。

その点については、私の1つのイメージは小倉金之助先生だね。あれは数学、それから数学教育、数学史でしょう。そのことは、「科学史と科学教育」に小倉先生を記念する文を書いたときに、私ははっきり触れています。

「小倉先生の『家計の数学』を教科書につかって、社会統計を講義したり、医学概論を小倉先生の『数学史』にまねて、くふうしながら講義した……」（「小倉先生と私の乳児死亡の統計的研究」）

前田 小倉先生は、数学史をずいぶんお書きになっていますからね。小倉先生は大阪府立医大の子科から……。

丸山 大阪帝国大学になった大阪医科大学。その前は、

先生は塩見理化学研究所の所長。その塩見理化学研究所の理化学の諸君が中心になって、大阪大学の理学部ができた。そのときには、総長が長岡半太郎、理学部長が真島利行。それで小倉先生は理学部の講師で、教授にならないんだよ。やはり先生の経歴が問題になるわけよ。

前田 そうなんですね。世の中の世間的な肩書きというのは、すぐそういう——その人に実力があいながら、ただ単なる形式的学歴とかそんなものが中心になる。

丸山 だから、まずこの小島勝治などという人間をどうやって評価するか。「どこの大学の先生ですか」と人は聞くよ。大学なんか関係ないもの。

前田 だから、それがこれだけのりっぱな業績を本当に5~6年の間に上げて、しかも七くなくなっているのは30歳ですか。

丸山 そう30歳。28で戦争に行っちゃったから、24から27~28のときの間書いた。戦死というのは殺されたということですよ。

前田 それにしても、ともかくすばらしい。大変なことですね。

丸山 それだけの能力が、何も大学におらなくたって、世の中の人々が大学の先生だと思えるような内容があるわけだ。私たちはそれを見ておるから、私たちも小島君がいま生きとったらと思うくらい、彼の勉強の内容はすごかった。だから、私はぜひ彼の残されている資料、彼の書いたものは全部世の中に出したいと思っている。あと2冊あれば出るんです。今度の第2巻は一般統計学、その次は、彼は弘済会に移って、弘済会から戦争に行ったから、社会事業統計、あるいは社会統計ということにな

るかな。

私が小島勝治を見つけたのは、布施市の統計書を見たときに、私はびっくり仰天したんだよ。せんだってまで町だったのが今度市になって出てきた統計書が、こんなのだら、どんな偉い人が書いたのかと思ったね。そして、これは一体どういう人なんだとって松野竹雄君に聞いたら、それは小島君という人だという。それじゃ小島君に会いたい。それで会ってみりゃそれこそ若い。私よりも若いんだから。それでやっている仕事はすばらしいでしょう。それではひとつ研究会を組織して、勉強会をやろうということになって、彼がずっと組織して勉強会をやったわけですね。

だから、私の統計学の勉強は、本では大原社研で出した「統計学古典選集」、生きている人間で切磋琢磨して啓発されたのは、松野君だとか小島君ですよ。それから実質的には、私自身が乳児死亡の実態調査をやったことですね。私の統計の勉強は、こうやってやったんだな。

そしてそれを研究指導というか、そういうことを最初に手ほどきされたのが、梶原三郎先生です。私がそういう方向に行けるようにされたのも梶原先生だから、梶原先生が小倉先生に私を紹介されたり、高野岩三郎先生や森戸辰男先生に紹介されたわけだ。だから、当時の第一級の統計学者の警咳に接したわけさ。

そして世界的、歴史的な文献の日本語に訳されたもので、私は統計学を勉強した。実際のフィールドでは、人口動態統計の基礎になる死亡の1つ1つについて当たっていた。仲間には、実際に統計調査や実態調査をやる役人、統計係や調査係という連中と勉強ができたというこ

とで、私は統計学というものを身につけたといえはいるだろうな。

それで一番、生き残っ、ちゃ、たんだから、生き残りの者は何をやるべきかということは、考えざるを得ないですよ。そこで私はいま、何とかして小島勝治のものだけは全部出したいと思って……。

前田 そうすると小島さんは、もし現存しておられると、お幾つになられるのですか。

丸山 六十幾つだろうな。大正3年生まれだ。

前田 現在もし生きておられたら、66歳ですね。

丸山 死んだのは、昭和19年の7月28日と書いてあるけれどもね。

前田 それで話を、さっき先生が始められた医学史研究会に戻していただいて、さっきの森鷗外先生はじめ、あの辺のお話を聞かしていただけませんか。

丸山 森鷗外の問題は、何のことはない、ずっとうろろ調べただけだよ。

前田 そうおっしゃるけれども、それもだれも調べた者がおりませんから、少しこの機会におしゃべりしていただいて……。

さっきその延長線上に、杉亨二先生とか西周先生という名前も浮かんでくるんだよとおっしゃっていましたが、どういうふうに関与されてくるのか、その辺をちょっと。また西周先生と森鷗外先生は、同じ津和野で生家がお近いですね。私、いつか生家をお訪ねしたことがあります。

丸山 その問題については、岡田靖雄君が、吳秀三につ

いては詳しく研究した。10年ぐらいかかってやっておいたな。というのは、私が問題を出したら、それにくらいついちゃったわけだ。

前田 いまどこにおられるのですか。

丸山 彼は、その当時は松沢病院、いまは東大ですか。

松沢病院の院長であり、東大の精神科の教授である呉秀三について、精神病の学者としての、それから医学史家としての、スタティスティシャンとしての彼の偉さというものは、まだみんなにわかっていないんじゃないの。しかし、その当時の医学史の仕事というものは、富士川游、呉秀三、そういう先生たちが中心だった。ああいう先生はもういないな。

呉秀三だとか、富士川游、森林太郎、皮膚科の土肥慶蔵——土肥慶蔵の弟子が木下奎太郎だ。木下奎太郎が大学を出てすぐ入ったのが衛生学教室だが、すぐ皮膚科に変わって、土肥慶蔵先生のところに行った。

富士川先生なんか、医科統計学とか医科論理学なんというものを書かれているんですよ。これは富士川英郎先生からリコピーをいただいて紹介はしました。(「医学史研究第12号」)

そういうふうには、明治期、19世紀末から20世紀初頭における医学領域と統計学領域の源流において、どういうふうにして社会医学の方法論が確立されてきたかというのが、いま私にとって問題なんです。

前田 非常に大事なところですね。

丸山 そうなると、戦後、社会統計学派とか、数理統計学派とかに分かれているけれども、このごろはコンピュータというのが大はやりで、こういうのが歴史性、社会

性を持つか持たないかということによっては、ずいぶん違ふと思うんだな。

それで鴟外は、早くも明治20年代の段階において、統計的な方法という問題がどういう意味を持っているかということについて、自然科学の実験方法と統計的な方法というのは、医学研究、あるいは衛生学の研究においては不可欠だということをしている。ところが、実際問題としては、統計的な研究は軽視され、実験的な研究の方を非常に高く評価する傾向がずっと続いているわけよ。

しかし、それは社会問題として見るときには、実験ができないからね。ことに人間の生きたり死んだりというバイタルな現象については、動物実験しかできないでしょう。動物実験で類推することと、ここ数十年の間に疫学と称せられるものが非常に進歩したけれども、これはやっぱり観察だ。だからコレラ菌が発見されない前に、すでにスノーによってロンドンのコレラの対策が立つし、ペッテンコーフェルとコッホのコレラをめぐっての意見の対立など、(ペッテンコーフェルがコレラ菌を飲んだ実験は有名だ)あのコッホの細菌学の3原則というようなことは、条件ではあるけれども、それに支配されたということとは——だって、いまだってそうよ、結核菌があったって結核病は発病しないし、結核患者には結核菌は見えない。そういうのがあるんだもの。ですから、一般原則としてはコッホの3原則は正しくても、固執することはないと私は思うんだ。

それを大胆にもコレラ菌を飲んだのが、ペッテンコーフェルですよ。すると、ペッテンコーフェルとコッホの学者としての評価の仕方を、鴟外が自分でペッテンコー

フェルにもつくし、コッホにもつくし、どちらをどういふふうに評価しているか。これはやはり人物としては、ペッテンコーフェルですけれども、次の衛生学的な問題を処理するには、コッホの細菌学的な処法が、非常に効果的であることは認めていますね。

ですから、人物評価と業績評価とまた違うわけよ。しかし、それが研究者の場合であるとか、あるいは教育者、あるいはいろいろなポストについている人間の問題になると、その人の能力と、その人の能力を発揮したり、させられたりする条件によっては、その人の値打ちが必ずしもそのまま出ないんだよ。

そういう意味では、私は鴟外という人の実力が、もちろん近代国家をつくる日本の軍国主義の中で果たした大きな役割りというのは、すごいと思うんですよ。外国人は、日露戦争に勝ったのは日本の軍陣衛生だといっているんだからな。そういうのは鴟外たちの時代のもので、あの当時の日本の東京帝国大学の衛生学教室と、日本帝国陸軍の軍医学校の陸軍衛生、軍陣衛生、どちらかを学問的にも、社会的な実績からいっても、いろいろな意味で日本の衛生学の源流に位置づけるとするならば、私は陸軍軍医学校だと思っている。

そうなると、今度は東京帝国大学の医学部からの衛生関係の内務官僚になった人たちとか、そうではなくて、大学関係以外の出身の医者の方諸君とか、そういうのがやっぱり問題になるんじゃないの。その典型的なのは長谷川泰であるとか、後藤新平であるとかは非大学派、森鴟外とクラスメートである中浜東一郎などは大学派になるんだ。

いま中浜東一郎日記というのを、中浜明という中浜東一郎の息子さんが全部手で写して、原稿にして、私のところに送ってくださったんです。それを読んで、結果的には一部発表しましたがけれども、全面的には出版刊行のために本屋に渡しました。

そのことは、結局大学（当時、東京大学が日本で唯一の大学）で衛生学を勉強した人が、当時すぐ医学校の校長になったり、病院長になったり、あるいは内務官僚になったりして、医学というものを行政の中で定着させようとするときに、後藤新平のようなああいう働き方もあるし、そうでない働き方もあるわけです。中浜東一郎と後藤新平の関係などというのは、やはり事実だけでも明らかにする必要があると思うし、それから当時の日本の公衆衛生の発達の上における、森嶋外や中浜東一郎あたりの東大の諸君が中心になってやった「公衆医事会」の研究など、それのずっと後になると、私が統計調査部におるときにいうて、それができなくて、後でできた「日本公衆衛生協会」の「日本公衆衛生発達史」とかいう某課長が書いたのがある。そのときの資料はちゃんと大日本私立衛生会雑誌（寄贈本）があるんだ。

すでに日本の公衆衛生の中では、衛生統計というものが重要であることは知っておるわけなんだ。その実物教育をしたのは陸軍なんだよ。石黒忠恵からずっと、軍事予算の編成から、衛生事情だとかそういうものについて、統計というものがどんなに大事であるかということ、いやというほど知っているわけなんだ。そういうものやらいろんなもので、衛生統計の具体的なものを示そうと思って、材料は整理しているんだけどけれども、まだ私

はまとめきれっていません。

保健衛生調査会の仕事が、大正5年(1916年)7月8日に調査会が設立された。そのとき、8つの部会がつくられた。その第8の部会が統計だから。

いま日本厚生統計協議会はどういうふうになっているかね。

前田 5部会です。

丸山 会長は-----。

前田 曾田長宗先生。

丸山 曾田さんの戦後における経歴というのは、われわれとして見れば、非常に重大な道を歩んでいるわけですよ。いま先生は、日本人口学会の会長でしょう。

そうすると、衛生統計というものと人口統計というものと、どこが違うかということになるわけよ。よく探険隊を組織していくときに、医者がついていくでしょう。あの医者は探険隊のための医者なんだよ。

日本で民族関係の9連合学会というのがありますね。いろんな民族学的なテーマで、いわゆるこのごろはやりの学際的研究のために、9連合学会があるわけなんです。その中に医学者が入っているときも、バイオメトリーで入っているわけだ。私はそれはいいけれども、日本には日本民族衛生学会というのがあるんだから、それが参加できて10学会にでもしてもらえれば、外国とか、あるいは内地でもいいけれども、調べるということの意味はどういう意味を持っているかということ、もっと実入りのいい学問的成果と、実質的な成果が上がると思うんだけどどうだろうと、医学関係の連中に入れば、それはそうだし、じゃ、そういうふうにならわ

れも協力するからという話にはなったんだ。

ところが、長谷部言人という人類学者の大先生がいるわけだ。あの先生がイエスといわなければ、オレたちが幾らいってもダメだというから、「じゃ、ぼくが一遍話し合おう」といってやったんだけれども、結論は、医学は人類学の中にあるんだから、それでいいんだというんだ。それで終わり。それは3時間以上討論したけれども、ダメだったな。

調査をしたり、あるいはいろんなことをやるんだけれども、これは単なる解剖学的なバイオメトリーがスタティスティックの分野にあるという生物統計では、それでとまるだろうね。しかし、世界の統計学の潮流からいえば、それだけであってはならないとぼくは思うんだよ。それでまた話は、社会統計学派に戻るわけだ。バイオメトリーの方だったら、それは数理統計学派の所産だね。それは数学と統計学、数学と医学という関係だ。

しかし、数論理と物論理とは違うわけだ。数の論理と、物あるいは事の論理は違う。物と事とかいうものを、数であらわすあらわし方が、私はやはり統計学だと思うんだ。その事を、その物を、どういうふうにして計数化するかということは、私は非常に大事だと思う。数は、勘定する数もあるし、はかる数もあるわけだから。

そうすると、バイタル・スタティスティックとか、あるいは医療統計だとか、衛生統計だとか、いろんなヘルス・スタティスティックという問題になると、単に数学者だけじゃどうにもならぬだろう。医学者が必要だ。医者だけでもどうにもならぬから、経済学者が必要だろうし、いまだったらいろいろな社会事業家が必要だろうし、

あるいは心理学者も必要だろう。

そうすると、ソーシャル・ウェルフェア（社会福祉）の問題、あるいは保健問題でこういうことを考えたときに、やはりいままでのような医学統計ではダメだ。あれで十分だということではないけれども、あれだけではダメだと思う。そういう意味では、医学の中にある衛生学よりも、衛生学の中に医学があるという医学の方が、実質的に人間の健康にも疾病にも寄与するだろうというのが私の考え方なんだ。

要するに、厳密に学問的に区別されていくときに、一般大衆から近いところからだんだん遠いところに行くと、遠ければ遠いほど専門家というふうになるけれども、そのときに一番民衆とつながるところの学問をバカにしておって、一番民衆から遠いところの学問が学問だという考え方だったら、これは孤立してしまう。どうしても一般大衆、私はそこにデモグラフィーの意味があると思う。

デモグラフィーといったら、いまわれわれの世界では人口学という名によって呼ばれたり、バイタル・スタティスティックと呼ばれている。それが旧態依然といったら悪いけれども、ぼくらの力がないといえはないのかもしれないが、ジョン・グラント、ペティ、ジューズミルヒでしょう。あれは典型的なデモグラフィーですからね。そして、それを現在にどうやって生かすかというのが、いま当面している私の仕事なわけよ。

それは政府機関における大集団は、政府機関がやればいいし、世界の機構がやればいいけれども、それと小さな集団の問題をどうやって両立させるかというときには、スタティスカル・スタディーと、ケース・スタディーを、

どうやって両立するかということが、私にとっていまのテーマです。

だから、ライフテーブルにしたって、ああいうものを大学の研究者がやらなければならないような統計政府機関じゃ、困るわけよ。むしろ、「こんなのが欲しいんです」といったら「はい」と出して、それを研究するというこゝとでなければ、初めからやらなければならないでしょう。

それで私たちがいま当面している問題は、学校卒業生のライフテーブルというやつだ。学校卒業生というのは、プロフェッショナルに生まれたということ。いまの普通のライフテーブルは、出生という生物学的な、人間がオギャーと生まれたときからだ。オギャーと生まれる前と後との問題は、ペリナータルな問題なのね。そのところに、私たちが手がけた乳児死亡と死産とを分離して考えてはいかぬという問題が出てくるわけだ。

それで私は、加算ではいかぬというんだ。むしろ、それは比率で見なきゃいかぬ。けれども、それがそうなっていないな。だから、最も基本的な問題について、まだコンセンサスは得られていないわけだな。それなんかも、私が統計調査部にいるときに盛んに言ったんだけど、WHOがこう決めたからといって、そうなっちゃうわけだな。

だから、ペリナータル・デスの重要性は非常に重大だ。しかし、出生の以前と以後との問題は、全くカテゴリーが違うんだから、カテゴリーの違うものを、みそもくそも一緒にするのではなくて、そのカテゴリーの違いのウエートを明らかにするという研究の方が大事だ。こういうことですね。

そうなる、さっきいった出生から生物学的なライフスパン(生涯)という見方と、社会的に生産能力を持ち、一個の個人としては出生に始まるけれども、職業を持ち働くということになるのはいつごろかという、15歳と20歳の間だろうと思う。それはめんどうだから、一応20歳にすれば、乳児死亡と20歳との関係を見ることは、ちようど私が赤ん坊の死というものを、1カ月未満の死亡、いわゆる新生児死亡と、1年未満の死亡、乳児死亡との関係において見る見方と、アナログカルに行けるといので、そういう想定のもとにやってみたら、まさに予想したとおりにそうだし、学校卒業生のあれで見て、ゴンパーツだとかロジスティック・カーブがあてはまる。

だから、非常に社会現象であると同時に、生死の鉄則というのは、どうにもならないんじゃないかという気はするな。そうすると、われわれが生きていることの長さなんという問題は、量的な長さの問題でなく、質的な問題だね。だから、長く生きても、短く生きても、その人が本当に生きれたという生き方を、どうやって生かせるかということなんだ。それが、やっぱり福祉の問題であり、厚生行政、厚生政策、社会政策というか、社会主義の政策というのは私はそうだと思うんだ。いまは福祉問題よりも、お金の問題の方が先でしょう。人間の一人一人の命の大事さよりも、お金の大事さの方がすべて先行しているよ。

だから統計のときも、GNPなんていって、マイナスのお金もプラスのお金も一緒くたにして足しているんだよ。予防費の方と治療費の方を同じように足しているわけだ。冗談でないというんだ。このごろGNPというの

は、あんまり使われなくなったらしいな。しかし、そういう基本的な統計の問題を、概括的に把握する統計指標として、GNPなんという問題が出るときに、どうして人間の命の問題の計量化のときには、皆さんあまり頭を向けないのか。もしそれが向けられるとすれば、いまのようなGNPが大きいといたって、予防費にどれぐらい使っているか、治療費にどれだけ、その比率はというのを出してやれば、一目瞭然、その社会が健康であるか不健康であるかすぐわかる。

その中で、バイタル・スタティスティックで一番簡単で、一番確実なのは死亡統計だから——死亡統計も、死因統計や職業別統計はむずかしいね。それと一番簡単なのは赤ん坊の統計だよ。親は子どもを大事にするんだから、私はいつもいうんだよ。「あなたが生きているのは、赤ん坊のときに死ななかつたからではないですか。なぜかといえば、あなたはこれから何年か先、50~60になったときに、死の危険にさらされるでしょうけれども、その危険はあなたが生まれてから1年間にすでにあったんだ。それをどうやってくぐり抜けてきたかということはおなた自身知らぬでしょう。だから、必然的に自分というものを知るのはいつからですか」。

だから、乳児死亡というものがどんなに低くなっても、これはわれわれにとっては、少なくとも死亡統計に関心を持って人々は、世の中の乳児死亡が少なくなったという理由で、乳児死亡を軽視するというようなことはあってはならないことであって、いまこそ乳児死亡の本質というものをわれわれが知るのに、よい時期になったんじゃないだろうかと思うね。

一方、生まれてくる子どもは奇型が多いとかいうような問題で、お母さんの問題に当然なる。すると、食べ物  
の問題に当然なる。それは空気や水の問題になるでしょう。だから、公害問題になるわけだ。すべてがめぐりめぐっているわけだ。そういうところをどこで切って、どこでつないでいて、それを数量化して、だれにでもわかりやすくというようなことを考えなければならぬのが、私は統計だと思ふんだよ。だから、ありきたりの統計でも、使い方によっては使い道がある。新しい統計調査を起さなくても、使い道がある。

前田 それはそのとおりです。

丸山 そういう努力を、いままで私自身が実践してきているわけよ。どんな小さな数字でも、ムダにはできぬ。だから、ケース・スタディーというものは大事だ。スタティカル・スタディーも大事だ。

前田 先生、大体きょうのお約束の時間がまいりました。どうもありがとうございました。

前田 どうも先生、昨日は遅くまでありがとうございます。またきょうも1日いろいろとお話をいただかなければなりません。

昨日は、先生が先日ご出席になった世界記録会議のお話から、先生のたどってこられた道筋と申しますか、先生の学ばれた先生方や、あるいは関西でこういう学問研究を通じていろいろと触れ合いの多かった諸先生方のお話をさっと承ったんですが、その中で、先生ご自身の言葉であったかどうかちょっと記憶しておりませんが、自分というものを先祖との結びつきで自覚し始めたことは大事なことだし、過去を探索する中に未来の栄光や曙光があるんだという認識は大事だよ、というふうにおっしゃっておられたと思うんです。

重複することになるかもしれませんが、きょうは先生ご自身の大学時代から今日までのお仕事について、先生ご自身の研究のベースは違っておらないかもしれませんが、先生のそのときそのときの焦点というのは、少しずつ重点の置き方が変わりながら研究を進められているだろう、その辺を、きのうお話のあった先生方との結びつきにももう一遍触れながら、少し内容的に詳しくお話をいただきたいと思っております。

たとえば、かなり早くご発表になったアルファインデックス、ああいう名前をつけられた経緯など踏まえて、アルファインデックスの意味合いなど、私どもは長年おそばにおりましたから幾らか知っておりますが、改めてひとつもう一遍教えていただいて、場合によったらちょっと質問させていただくかもしれません。

先生が一番最初調査的なことをされたのは、結局岸和田の調査でございますね。

丸山 そうです。

前田 もしその前に、私どもが知らなくて、先生が学生時代にも何かされたことがあれば……。

丸山 いやもう学生時代はありません。

梶原三郎先生の問題提起、あのときに、日本では死亡統計の中で問題なのは結核死亡と乳児死亡ということで、その尼崎市における研究があるわけですよ。梶原三郎先生はそういう点では非常に炯眼だな。鋭く見られておって、結核の場合には年齢別死亡と男女別の型、これが歴史的に変わってきているという予想を立てられた。当然これはわれわれ、石原修先生の仕事を見ても予想されることだけれどもね。ちょうど軽工業＝女工、重工業＝男工、こういうふうになれば、当然予想はつくわけです。そういうものを、梶原先生は歴史的並びに地域的に予想されていたわけですよ。それを、死亡診断書を書いた医師に直接に面接して確かめるくらいのところまでさかのぼれるようなフィールド・スタディーを、尼崎で開業されていた鈴木忍さん（研究生）にテーマを与えてやらされた。

前田 梶原先生が尼崎でですね。

丸山 その次に乳児死亡の問題を、やはり尼崎で鈴木忍さんがやられたんですよ。

前田 初回の尼崎の調査は、先生もご参画されたわけですか。

丸山 いや、私は全然関係ありません。

前田 そのときは？

丸山 ええ。

前田 そうすると、一番最初梶原先生のおやりになった  
尼崎の調査というのは、何年になるわけですか。

丸山 結核の方は、昭和10年よりは以前だったが、正確  
には覚えていない。

前田 最初は結核ですか。

丸山 うん。乳児死亡の方は、発表されたのは昭和12年  
ですよ。

前田 それは鈴木先生ですね。

丸山 そうそう、鈴木忍先生が「尼崎市における乳児死  
亡の統計的研究」というのを「社会事業研究」の第25巻  
第8号、第9号、昭和12年の8月号と9月号に出された  
んです。そしてこれ（「社会医学研究I 乳児死亡」303  
ページ 第1表）が出たわけです。

資料は、大正13年から昭和8年までの10年間。1933年  
だ。それまでの10年間に死んだ子ども1524人について、  
死亡診断書を書いた医師に当たってみずから調べた資料  
についてやられたんですよ。

前田 昭和8年。

丸山 そうです、昭和8年です。そして、それで先生が  
目っこをつけられたのは、その後そのとおりになりまし  
たけれどもね。

前田 それは何年くらい前ですか、第1回の結核の、梶  
原先生がおやりになったのは。

丸山 私は結核の研究のことはもう忘れちゃった。

前田 すると、梶原先生なんかのがこれですね。

丸山 だけど、梶原三郎先生の名前では出ていないから。  
だけれども、書いてあるでしょう。

昭和12年の第1回の人口問題協議会に、「市部と郡部における年齢別、性別結核死亡率の差異について」というのを報告されてますね。その研究は、梶原三郎先生が指導した鈴木忍先生が、尼崎でやられた結核死亡、引き続いて乳児死亡をやられたのがそれです。それをさらに確かめるために、乳児死亡問題を先生が私に指摘されたわけです。

前田 そうすると、丸山先生が岸和田でおやりになったのは、この乳児死亡の調査とはどんな関係になりますか。

丸山 岸和田に私が行って-----。

前田 ですから、フィールドを変えて、岸和田で同様な-----。

丸山 鈴木忍先生は尼崎市居住の臨床医だもの。開業医の方だからね。だから、診療の余暇だものね。私は教室の助手でしょう。だから、ただデスクプランでデスクワークやっておいたらだめだ、それで直接岸和田に移住して、岸和田の市民生活を自分が味わいながら、乳児死亡問題の事例調査に取り組んだわけだね。

前田 そのとき先生は岸和田に移られたわけですか。

丸山 そうですよ。そのことで、きのういってあった藤本幸太郎先生が、私の「乳児死亡研究ノート」を-----。

前田 全部転載した。

丸山 転載したといわれている内容のでき上がった基礎ですよ。だから、どうやら統計的研究というのと、デスクプランになっちゃったり、デスクワークになるけれども-----。これです、それ（「乳児死亡研究ノート」第1冊）をお読みになれば、初期の私の乳児死亡研究のことがわかるわけです。

前田　すると、岸和田の乳児死亡研究は、何年から何年まで。

丸山　昭和12(1937)年8月から15年くらいまでかかっていたんじゃない？直接乳児死亡の対象として統計に挙げたのは、1937年から38年の1年間をやったわけですよ。ね、事例調査そのものずばりは。だから、後始末だとか、いろんな付帯的な研究がありますからね。それが昭和15年くらいまでです。6年くらいのもありますね。

前田　それで、その昭和15~16年までの間で、先生のアルファインデックスはいつごろから-----。

丸山　それはもう最初から。

前田　一番最初からですか。

丸山　一番最初からというのは、いまの死因を先天性死因と後天性死因に分類すれば、先天性というときには、子どもの問題よりもお母さんの問題を中心にして対策を講ずるのでなければ、乳児死亡というものは避けることはできないよという問題ね。後天性のは、それはもう目に見えているから、乳幼児とお母さんを込めてだけでも、それは生まれてからでも、対策いかんによっては成功するであろう、こういうことがわかるわけだね。

そのときに、そういうものを統計的にあらわすのに、どういうふうにあらわしたらいいかというようなことや、理論的な問題、実際上の問題、そういうものを明らかにしなければいけない。それで、生後1カ月のところを区切って、その以前、以後という資料が注目されたわけですよ。すでに日本でも、暉峻義等先生だとか、金沢大学の高口保明君あたりが、そういう資料を出してまわすわね。だから世界的にも大体見当はつきますわ。

だから、臨床的にも、また生育史の上においても、生後1カ月というものが、区別する一つの目安になるということも、まあまあ世界的なコンセンサスを得られるような状況にあるようだということは、だんだんとわかってきましたよね。それを、外国の資料や日本の資料、それから過去の資料、いろんなもので確かめて、そして具体的な集計技術の上においても無理がないということがはっきりわかりました。だから、それで新生児死亡というものを1カ月未満にし、1カ月以上と2つに乳児死亡を分けるということをやった。それが最初の分類です。

前田 そうすると、その当時、1年未満が乳児死亡で1カ月未満が新生児死亡、それから1週間以内が早期新生児死亡という用語は、もうはっきり出ちゃっているわけですか。

丸山 まだ出ていないです。新生児死亡まで。

前田 1カ月未満を新生児死亡という概念は、大体世界各国共通だったわけですね。

丸山 そうそう、ネオナタール・デス (neonatal death) というやつ。

前田 それで、その1年の乳児死亡についての先生のご研究の一番最初の論文が、この「乳児死亡率減少策への一示唆」というやつですね。

丸山 そうです。きのうごらんに入れた。恐らく日本でそういう研究論文が、だれにでもわかるようにと、かたかなで書かれて——これが昭和10年(1935年)の呼びかけですよ。これがこれ(「乳児死亡」の276ページ)です。これのヒントはこれ(274ページ)です。これが1930年のJ.F.C. Haslamの The Recent Advances in Preventive

Medicine の第4章、乳児の問題。ニュージーランドとオランダにおける20年間の歴史を示している、長い統計があるんですよ。

前田 話は変わりますけれども、先生は、私のものが初めて世の中で何か活字になったのは「ある老医師の死」だよとおっしゃっておいりましたけれども、「乳児死亡率減少策への一示唆」と、どちらが先ですか。

丸山 それは「ある老医師の死」の方が先です。

前田 この乳児死亡とは直接関係ないかもしれませんが、先生の、一番最初活字にされたもののお話をちょっとしてくださいませんか。

丸山 それは学生のとこだね。

前田 恐らく先生がある種の感銘をお受けになられたから、そういうものをお書きになられたらと思うのですが……。

丸山 そうそう。それは大学の文芸雑誌「銀杏」に書いた。「乳児死亡……」の方は、梶原三郎先生が、そこまですとまとまったら書いたらどうだということを書いた。

前田 先生がそこでおっしゃっている「老医師」というのはどなたですか。

丸山 渡辺熙。

前田 渡辺熙先生ですか。

丸山 それは、渡辺熙という先生と私が出会ってから、先生の人物やその生涯を学んで、医者としてすばらしいということ……。

きのうも話したように、何しろ入沢達吉先生あたりの時代の医人が、社会政策学会で、当時の東大の横手千之

助先生と並んで、民間の医人としてはわずかに彼くらいのものですよね。社会政策学会の会員ですよ。そしてその間に彼は、きのうごらんに入れた、紡績工場における健康管理の問題について、いまでいえば医療経済、工場経営、あるいは工員の生活管理、宿舍管理というようなところの基礎的な経済問題まで健康問題と結びつけて、しかもそれは単に工場内部だけの問題ではない、日本全体の問題だということまで出している点が、やはり私は卓抜なる見識だと思えますよね。

それに従ってというか、その次の段階で結核問題が医学的に取り上げられて、そして日本の保健問題なり、労働問題なり、あるいは社会政策の問題なりに大きく呼びかけたのが石原修の「女工の結核」だからね。

そういう先生が、途中から漢方にかわっちゃったということ。そして、その漢方にかわってからも、ほとんど独力で、日本における伝統的な医学を継承させようと努力された仕事を見ているでしょう。「東洋医学治療実験集」といったかな。それは、自分の診療した患者の経過から、自分のテーゼを検証するようなケーススタディーを細かく書いているんですよ。

そして最後には、東洋医学の漢方における最も基本的な文献である思想を書いている「素問」、その「素問」の「運氣論」の問題を先生が書かれて、それが最後の遺言になりました。印刷になったときか発行されたときに亡くなられたんじゃないかな。

そういう著述のときには、先生は京都大学の天文学の新城先生のところまで足を運んで、その「運氣論」の問題などを勉強されたりしておったですよ。全く一人だね、

独立独歩。

いま一人私の漢方の先生では、清川玄道という先生もおられた。これは徳川幕府の御典医の養子で、お父さんもその方も清川玄道というんですよ。阪神の青木というところにおられた。この方の最後はわからないんで調べているんだけど、なかなかわからぬ。

前田 当時は何を？

丸山 漢方医よ。純粹の漢方医だね。もうそのときは70以上でしょうね。

それで、先生が私の体を診て、お腹を押さえて、「丸山さん、こんなお腹じゃだめだよ」——お腹というのは、つきたての餅のような感触になっているお腹でなければ健康とはいえません。私はいまそうなっているからね。

(笑)

前田 そのころ先生のお腹はどんな状態だったんですか。

丸山 もうシェパードのお腹みたい。背中とお腹がくっついていてような……。あれじゃお腹といえないわね。お腹を押さえて、痛いところや、かたいところがあったらいかぬわけだね。そのときいわれたことで、お腹が変わるにつれて健康になってきた。

その後、そういう方向づけを指示して、私たちの生活を変えるチャンスをつくられたのが桜沢如一先生です。あれからまた、突拍子もなくあれだったんだな。どうも本当らしいけれども、まず自分で確かめてみなければいかぬというて、私の生活、家族の生活、それがいま親子3代続いている。それが有害食品研究会の活動の基礎になっているわけだね。そして今度アメリカに行って、モルモン教徒の知恵の言葉という中に、すでに食べ物のこと

が出ているでしょう。

それから、統計とは直接関係ないけれども、アーユルヴェーダ。私の歴史的研究の中から到達した古代インド医学だけでも、その中にはは、きりとそういう食べ物のことが出ている。

これですよ。これが大地原誠玄先生の「スシュルタ本集」です。それで、この続き(「チャラカ本集」)を何とかしたいと思って、この孫弟子に当たる矢野道雄君が翻訳してくれたんですよ。

前田 このチャラカ・サンヒター(本集)という人は、私はよく……。

丸山 一人じゃないんだ、チャラカというのは人の名前だけれども。……こんなこというとったらきりがなし、統計とは直接関係ないよ。

前田 まあそれでも先生のおれですから。

丸山 いま私はアーユルヴェーダに力を尽して、それで10年たちました。これは、日本における医学問題や私自身の実学問題については非常に画期的なものであり、次はここ(「スシュルタ本集」)に書いてあるでしょう、「医療とその体制について」。そして、これが大地原誠玄先生のお原稿だけれども、これをどうして私が出さなければならぬかということを書いておきます。

これらすべてが、私にとっては、一方の統計とか近代医学とか、もう一つの分野、いまの渡辺熙先生の東洋医学、それから桜沢如一先生の思想、そういうふうに勉強して行ったところが、このチャラカとかスシュルタの古代インド医学になるわけです。そうすると、今度はアメリカのユタ州のソルトレークの問題と、私にとってはつ

ながりがあるんです。

前田 この辺の前後、ちょっとわかりませんが、先生が「この話を落としておったな」といっておられた吉田顕三先生のお話をちょっと聞かしていただけませんか。それがこの辺の時代になるんじゃないでしょうか。

丸山 吉田顕三先生の「保寿利国論」は、古本で50銭で買った本だよ。いつのころだったか、もうずいぶん古い本だからね。

前田 これが50銭ですか。

丸山 うん、たしか50銭だと思ったね。昭和の何年ごろかね。どこかに、買った日にち書いてないかね。

この本読んで、私はびっくりしたんだ。

前田 発行は大正12年。

丸山 そうそう。買ったのは昭和の初めでしょう。そのオリジナルがこれ(Saluti senectutis)ですよ。

前田 リンドハイムですか。

丸山 リンドハイム。

前田 これ、吉田顕三先生が全訳されたわけですね。

丸山 そうです。これ見てください、この序文を。

前田 読めぬですよ。

丸山 そうか。じゃ、読まなくてもいいとして-----。

前田 これはアダム・スミスのも-----。

丸山 病気になって寝込んで、もう右手が使えなくなっ  
てからそれを翻訳されているんですからね。左手でやっ  
ているんですからね。その事実を聞くだけでもただごと  
じゃないでしょう。

前田 ええ。先生がこれを昭和の初期にお買い求めにな

って読まれ、驚嘆されて、その後は吉田顕三先生との……

丸山 それは、教授会をやる部屋が大学にあるんです。そこに吉田顕三先生の額がかかって出ているわけですよ。この先生が大阪医学校の校長さんだったから。

前田 それじゃ、これをお買い求めになったころは、すでに吉田顕三先生は亡くなっておられたんですか。

丸山 もちろん。亡くなられたのは大正13年3月1日だったでしょう。62歳。

前田 ずいぶんお若かったんですね。

丸山 これは高木兼寛の先輩だもの。そして、日本で海軍からロンドンに留学して、7年間向こうで勉強した人だもの。

前田 海軍の軍医ですか。

丸山 軍医さんだ。明治5年(1872年)に行っているんだもの。

前田 そうすると、森鷗外先生……。

丸山 時代が全然違う。

前田 先輩？

丸山 はるか。それで東京海軍病院長で、この海軍病院長のあとがまが高木兼寛だよ、時代的にいえば。それで彼は、東京の海軍病院長から大阪府立病院院長兼医学校長に、明治14年、1881年に来ている。

それで、いま私が問題にしているのは、この1880年前後の問題が、私にとっては非常に問題だね。これはもう世界的に問題だよ。

だから、ちょうどいまから100年前。大体問題を考えるときには、やはり100年前後を考えなければいけない

んじゃないの。そうすると、生きている人間としては、3世代くらい前と3世代くらい後ということになる。やっぱり、じいさん、孫、ひ孫というくらいの範囲で物を考えるのでなければいけないんじゃないかと私は思うがね。

それで、この「保寿利国論」から「聖運録」に行くことについては-----。

前田 「聖運録」というのは、どういう-----。

丸山 これは1974年度の日本人口学会に報告しているわな。

前田 丸山先生がですね。

丸山 ええ。せんだってでも続きを日本人口学会で報告した。

前田 すみませんが、「保寿利国論」から「聖運録」の思想というか、それをちょっと——ちょっとというのは無理かもしれませんが、大要どういうことで、先生がどの点について感銘を深くされたのか-----。

丸山 それはリンドハイムの *Saluti senectutis* を「保寿利国」と訳しているわけです。

この本はク篇から成っておって、「第1篇は動物及び植物の命数並に彼等と人類との関係を説き、第2篇は、古代より今世(1909年)に至る人類死亡及び寿量に関する研究の成績を述べ、第3篇には、古今長寿者及び80歳以上に達せし老者七百余名の経歴を簡明に掲げ、第4篇には、人類の価格、並に長寿は、国家及び社会の経済的利益なるを論じ、第5篇には、安息状態に於ける死亡並に人類が、自己健康の為、国家及び社会の為、長く利益を応用せざるべからざる執業力の支持点を講じ、第6篇に

は、人壽に関する研究の結果に基づき、断案を附し、第7篇には、人壽を有為的に延長せん為、国家及び社会に向て、その奨励方法を提供せり。」という内容の本なんだ。

これが大正2年でしょう。どうしてこれを世の中の人は余り問題にしないのかね。

これはおもしろい本だし、オリジナルはどこにあるかと思って、長い間かかって探したわけですよ。実はこの本(「Saluti senectutis」)は京都大学の本なんですよ。「京都帝國大學法學科」とあります。明治44年1月13日に財部静治先生時代に買った本ですね。それをお借りしているんです。

それで今度は、リンドハイムのこの3部作が大事なんですよ。リンドハイムは国会議員なんだよ。日本の国会議員で、これだけの見識を持っている代議士諸君おったら、ひとつこちらから教えを受けに行きたいね。Saluti juventutis, Saluti aegrorum, Saluti senectutisの3部作。

それで aegrorum というのは、近代国家における患者、それから病弱な人たちに対する保健治療、それがどういう問題と意味を持っているかを社会統計的に研究しているわけですよ。それから juventutisの方は、20歳までの肉体的、精神的な発達の過程における問題を書いている。要するに青年論というかな。それから senectutisの方は、いまいったように終末的な老人問題を取り扱っている。

「保寿利国論」の中でいまでも役に立つのは、恩給生活者の問題だとか、寿命の問題を取り上げているわけですよ。だから、国家及び社会に対する、健康より生ずる

利益、高度の死亡率より生ずる損失、長寿より生ずる利益ということ、これは経済的な問題とこういうものを結びつけているわけだよな。そういうわけで、乳児死亡の問題なんかも出ている。ぼくはこれを何遍も何遍も読んだ。おもしろくてね。

そしてその中で、昔からどんなふうなという歴史的な問題を書いている。ミュンヘンのマックス・ケムメルリヒという人の「独逸国帝室及王家の家族に於ける寿量及死亡」という論文。あるいは「カローリング時代以降独逸国公民の死亡」、これはプリンチングが書いている。そうすると、このドイツの帝王並びに家族の話、詳しいんだよな。それがそのまま日本の天皇家の、吉田顕三の研究がうり二つなんだ。

前田 何がうり二つですか。

丸山 やり方、書き方、調べ方が。要するに統計的に表象する。まさに「聖運録」の下敷きになるような研究がこのケムメルリヒの研究なんだ。

前田 これがベースになっているわけですね。

丸山 と思うんだ。

前田 研究の手法とかがですね。

丸山 そうそう。

前田 「聖運録」は、吉田先生、ご自分が研究し、いろいろデータをあれしてお書きになったわけですね。これ（「保寿利国論」）は全訳翻訳ですね。

丸山 そうそう。

吉田顕三先生の書かれた「聖運録」の内容が一体どういう第一次の原資料に基づいているのかということが、まだぼくにはわからぬわけですよ。それで、先生がつい

に10年間ばかりはそれに没頭されて、病床で右手のきかないまま左手で書かれたのが、ごらんのものなんですよ。こんなのも、ただ物好きではできないことでしょう。

前田 そうですね。

丸山 それで、先生が亡くなられて50年たったときに、私がこれを発表したわけだ。その原稿は、昭和40年の6月16日に中村敬三先生のお宅で見せていただき、それを拝借して、いま手元にある。

いまこの吉田顕三先生のことについては、多くの人は余り——「回想録」の中でも、そのことについては全く触れてないからね。それで原稿書いて、実は中野操先生の傘寿というか……。

前田 80歳のお祝いですね。

丸山 あれの記念論文集に差し上げたいと思って書きかけたんだけど、まだ書けない。

前田 だけど、きのう先生……。

丸山 もうわれわれ老人だからね。老人の部類に入って残った者のやるべきことは何かということ、やっぱりやらなきゃね。

こんな本があるのよ。(大宅壮一「実録天皇記」)こういうのを読んじゃうと、もう全くわれわれのやっていることなんかは、チョロイといえばチョロイだろうね。

前田 それが先生の「食品公害論」ですか。

丸山 そうそう。(笑)

前田 笑、ちゃいけないですね。

丸山 そう。結局食べ物が人間の命の長さも決めるだろうし、食うということは、生活の一番原始的な問題だと思うのよ。食えるか食えないか、食うためということ、

食うということは非常に大事なことだよね。

そのことについては、アーユルヴェーダというのは非常に手厳しく問題を提起している。と同時に、私が今度発見したのは、モルモン教徒は啓示としてそれを示している。しかしそれはセントを与えている程度だけれどもね。アーユルヴェーダはすごいよ。アーユルヴェーダはフィジカルな問題提起なんだよね。それを踏まえて、お釈迦さんはメタフィジカルに、新興宗教として仏教を創立したんだな。あれはメタフィジカルなんだ。

前田 食品公害というか、有害食品的なことで、いわゆる有色というか、着色食品とか添加のやつを、先生昔からいっておられましたね、衛生統計調査部で。

丸山 その問題が、桜沢如一先生の、日本における食糧問題ですよ。食べ物が大事だ。そして、日本に近代西洋の学問が入ってきたときに、いち早くその問題を提出されたのが石塚左玄です。

前田 日本の医学とか衛生学の場合は、ほんとに陸軍の軍医の先生方が主力的になっておられて、残念ながら帝国大学の医学部にはないというところも少しい過ぎかもしれないけれども、ほんとに、しかもかなり遠い将来を見通して-----。

丸山 ええ。ですから、やはり明治政府と日本陸海軍、こういうのが新興国家における中軸じゃなかったの。

前田 さっきからお聞きする先生方が、みんなことごとくとっていいような-----。

丸山 薬剤学だ。

前田 薬剤関係ですからね。

丸山 それは要するに藩閥が解体して、人物が雨後のタケノコのごとく出て、実力の発揮できる場面というのが——いまだって、新興国家の働き手と云ったら、大体軍人じゃないの、アフリカにしたって。

前田 韓国もそうですね。

丸山 よしあしは問わなければならぬけれども、働く場面というのは、命を張ってイチかバチかじゃないの。私は、軍人は余り好かぬし、人を殺すのは好かぬけれども、医学なんというのは全くその逆だからね。そういう中での、森林太郎のような軍医というものの軍隊の中における役割り、これはやはり私はもっと考えてみなきゃいけないという気がするわけだ。

その大きな鴟外の日常の仕事と心のうちのジレンマというのか、その悪戦苦闘が文学としてあらわれたというのが私の見方で、いまの文学者とかあるいは作家なんてのは、自分の書きたいものを表現することが唯一の目的でしょう。鴟外の場合だったら、別に原稿料をもらわなくてもいいんだもの。本職は陸軍軍医なんだもの。陸軍軍医だけやっておられないくらい、何か彼には内面的なものがあつた。それだけ、明治期におけるインテリというか、彼のような教養のある人なら当然だと思ふね。それが出ているのが彼の文学的な面であつて、いまの人たちは、鴟外のそういう面ばかり見ておつて、彼の下、隠されている問題については、余り関心がないのではないだろうか。

そしてきのうの、鴟外と統計学がつながるわけさ。

前田 いまおっしゃつた、森鴟外先生の統計学への貢献といひますか、そのところを少し……。余りよく知ら

ない人もいると思いますので。

丸山 これを最初に指摘したのは林文彦氏だろうね。それは、差し上げたこれに書いてある。

前田 書いてありましようけれども、ちょっとそれをお話しくださいませんか。

丸山 長くなるなア。

前田 いえ、長くなっても結構ですから。その辺はやっぱり、統計学発展の中では、森鷗外先生の事績を見逃すわけにはいかないですから。

丸山 それは統計学一般もさることながら、あの時代、あの時期において鷗外がヨーロッパの軍隊、それから日本における石黒忠恵のあの仕事、要するに軍が伸びていく基礎に——日露戦争に勝ったのは日本の軍医の成功だとアメリカの連中がいうているんだからね。そのことについては、私はどこかに書いているんだよ。

それで、私がここでいっているように、最初に鷗外からエステルレン (Oseterlen) にさかのぼっていく。そのとき、エステルレンのことになると、そこに書いてあるように、Medicinische Logikだとか Medicinische Statistik、あるいは Sanitätspolizeiとか、こういう統計的な把握、あるいは歴史的な把握で社会全体を見る。

だから、保健問題を見るときに、個人の保健問題は非常によくわかるわけだ。ところが、さっきからいっているように、長い民族的なというかファミリーの立場、パーソナルの問題じゃなくてファミリーあるいは民族、あるいは交戦だったらその住民、こういうようなもので健康を見なければ、健康というものの本質はわからないわけでしょう。

そしてそれは、単に病気になるとかならぬとか、早く死ぬとか長生きするとかいうことだけじゃないからね。そうすると、この「保寿利国論」なんかの、プロシアとかオーストリアとか、ああいうドイツ語圏の新興国の諸君の物の見方、そして学問のそれへの集中性というものについて、もう一遍われわれは19世紀末のものを考えなければいけない。

そしてその前には、有名な産業革命のイギリスの問題があるでしょう。その時代にマルクスやエンゲルスが出てくるわけだね。

そういう時代に、今度は移民がイギリスからアメリカに行くでしょう。そしてもう奴隷問題なんというのがあるって、南北戦争が起きるし、そのときには、人間なんてのは全く動物扱いというか、動物以下だね。その連中が自由主義アメリカで200年近くなっただいまにおいて、系図を探すとか先祖を探すとかいって、切手ブームと同じくらいブームになっているという事実は、やはり注目すべきじゃないかと私は思う。それが今度私がアメリカへ行ってきた一番大きな収穫だよ。

それが今後どういうふうに進化するか。そして、コンファレンス・オン・レコーズに集まっている人たちは、もちろん古い国もありますよ。今度中国から3人、われわれと同じように招待されている。ところが、中国だとか、朝鮮だとか、日本というのは、西洋と違、た家族制度を持っているからね。だから、こういう国々の問題と非常に個人主義の問題が統計の中でも出ているわけです。

というのは、バイタルスタティスティックというのは、全く個人の数の勘定でしょう。ところが健康問題になる

と、どうしても家族単位に考えなければならぬわけですよ。

前田 さっき先生がおっしゃった、家族単位もさることながら、家族単位よりさらに進んで、広域地域がベースにならないといかぬですよ。

丸山 もちろんですよ。そして日本といたら府県段階に分けているでしょう。分けないよりは分けた方がいいが、府県段階でも、たとえば石川県が、加賀と能登ではまるで違うんだからね。だから、封建社会における伝統的な歴史が、私たちが気がついた時期においても画然と違っているという事実を、われわれは認めるわけよ。そうすると乳児死亡でも、地方別に非常に隔絶しているわけですよ。

ところが歴史は、平均化の法則に従って普遍化しちゃう。いま大体普遍化しちゃっているけれども、普遍化してしまえば、本質的なものがゲノフィーゼとしてはゲノタイプスとして残るかもしれないわね。フェノタイプスは変わったけれども、ゲノタイプスは残るわ。そういうことをわれわれが見ることによって、健康問題の現象問題と本質問題というやつを踏まえた対策を講ずる必要がある。それには乳児死亡研究というのほうってつけどいいうのが、いまでも私の変わらざる考え方だ。

そのモデルというか見本として、小さなサンプルが乳児死亡で、乳児死亡のもっと小さなサンプルが新生児死亡と乳児死亡の関係を比率で示すというアルファインデックスの考え方になるわけだね。それをもっと拡大すれば、赤ん坊と大人という考え方のベータインデックスになるわけですよ。それを理論的につないでいくのがあの

デルタカーブですよね。デルタカーブというのは $\Delta x$ カーブのひっくり返したやつだからね。これは $\Sigma dx$ カーブだから。そういうことが実際問題としてどうなるかというので、いま非常に小さなサンプルでもというのでやっているのが、卒業生名簿からの死亡生残表ですわね。

前田 私はもちろんアルファインデックスもよく知っておりますし、物のご本にも詳しく書いてありますけれども、ここではこれなりに記録を残さなければなりませんので、すみません、そのアルファインデックス、ベータインデックス、デルタカーブを少しお話しくださいませんか。私が知っていることと、先生の記録としてここに残ることとは違いますので。

丸山 それは書いたものをそこへちょっと引用すればいいんじゃないか。それは時間のむだだよ。いっていいけれども、それよりももっと先へ進んだ方がいいと思うがね。会の進行上、そこへそれを入れることにしておいて。

前田 それじゃアルファインデックス、ベータインデックス、デルタカーブをここへ入れます、私は先生のお考えは知っているから。

丸山 ぼくのは、アルファ、ベータ、ガンマ、デルタというギリシヤのアルファベットの4つのインデックスを提唱しているわけです。

アルファというのは、梶原三郎先生の命名になるアルファ会を私が記念したわけです。アルファ会というのは、あの時代に、医学教育の中でどうしてもフィールド——医学教育は、病院ではなされますけれども、地域でなす

ためには、どうしたってセツルメント活動が必要なんです。ところがセツルメント活動というのは、当時の一般社会情勢からいうと——大阪の場合でしたら、関西学院が四貫島でセツルメントをやっておりましたがね。そしてあそこのところ、何か大阪の大学の出張診療所があったんです。それを基礎にして私はやりたかったんですけども、いろいろな事情でそれができなくなって、結果的には私の計画のセツルメントは、大阪大学にはついにできなかったな。

それで、衛生学ではどうしてもそういう教育活動をやらなければいけないので、要するに学生の自主的サークル活動、学生が自主的にやるのをわれわれが協力して、名前を「アルファ会」とつけた。

アルファ会というのは、牛のえさのクローバーの一番よい草の名前がアルファアルファという。梶原三郎先生はこのアルファアルファという草の名前をとってつけられたんですよ。それにまた、何でもイロハのイから始まることだし、非常にいい名前だし、私自身の研究のインデックスに、まさか「丸山指数」なんというのは余りにも僭越だから、「アルファインデックス」という名前をつけた。

その前にデルタカーブがあったわけだね。その「デルタ」というのは、ナイル川のデルタとか何とかデルタというのがあるでしょう。あれは実りのいいものだよね。デルタの方が先なんだからね。だから「デルタ」とつけたんだが、偶然、「アルファ」が出たから、「デルタ」から「アルファ」に行、て、その次には「ベータ」と「ガンマ」に行、たわけだ。

それで、そのインデックスが非常に意味深い、それこ

と啓示的な示唆のある問題をわれわれに教えてくれると  
 いうのでやっただけけれども、ガンマはもう時代的に効  
 用はなくなっただね。しかし思想、概念はいまでも生きて  
 いるけれども、インデックスとしてはだめだね。けれど  
 も、ベータインデックスはまだ検討の余地があるんじや  
 ないか。これは再検討して、まだ使えるというふうにな  
 っている。

アルファインデックスはもう使えないと、皆さんいっ  
 ておられるようだけれども、これはやっぱり使いようが  
 あると思いますね。それで小倉金之助先生も、アルファ  
 インデックスだとかいうようなものの形式論理の問題じ  
 ゃなくて、そういう思考発展の論理構造というものは、  
 学ぶのにはそれこそ素人でもおもしろいだろう、そして  
 またそれは非常に意義のあることであるし、統計の勉強  
 には有効だということを指摘されております。私もまさ  
 にそのつもりでやっているんで、統計というのは専門家  
 にだけ還元してしまって、むずかしい機械を使ったり、  
 むずかしい数式を使ったり、そして簡単なものが出てい  
 って、それでもって判断させられておったら、その行程  
 がわからないものね。

だから、いま問題にしているのは、きのう差し上げた  
 「生命表」というのは非常にポピュラーなものだけれど  
 も、平均寿命と叫べたら、これはもう平均寿命と乳児死  
 亡の関係というのは大体わかっているでしょう。だから  
 乳児死亡だけでいいと思うね。だけれども、あの平均寿  
 命というのは大事ですよ。むしろ平均寿命でなくて平均  
 余命の方が大事だからね。

前田 それはそうですね。

丸山 そうすると、平均余命の法則というものを見なければいかぬわけだね。そうすると水島治夫先生あたりの仕事が、いよいよ本番として登場するわけよ。

ところが、ああいう仕事は大学の研究機関でやらなくて、あんなの、厚生省あたり、統計局あたりでやればいいんで、その結果なり、あるいはその指導なり、あるいはその研究の方向づけなどを、水島治夫先生のような方がおやりになればいいんで、水島治夫先生がずいぶん苦労されて府県別なんかお出しになったにけれども、あれは本当いえば、先生にはお気の毒だったと私は思う。

というのは、先生が晩年に自分の「生命表」の研究について、「もう一遍考え直してみなきゃならないことがあるんだ」とおっしゃったというんだけど、私はついにそれを確かめる機会を逸してしまったことは非常に残念で、先生の指導を受けた、方々の諸君に聞いているんだけど、わからぬね。

きみ、水島治夫先生のところにうかがっているということだけれども、どんなことをいわれておったの、最後に。

前田 私の感じていたことがあるものですから、「私はこんなことを考えているんですが」ということで申し上げたのが幾つかありました。一つは、特に地域別の「生命表」の場合には、少なくともその地域で死亡した人たちのデータで計算してしまいますよね。ところが、実際それぞれの地域で死んだ人たちはある種の生活力を持っているわけです。したがって、大都会が平均寿命も平均余命も高い——高齢になると必ずしも平均余命が高いともいえませんが——それは若い、新卒の者が流入し

てくるわけですからね。

先生、どの辺までとればいいんでしょうか、要するにその地域の本当の生命力の調査というのは、生育地へ戻して計算し直さなければいけないと思うんです、たとえば東京で死んだ人も、20歳まで山形県で生まれ育ったとすれば、本当は山形県へ戻して計算をし直さないで、本当の地域別の「生命表」にならないんじゃないかと思いますがということで、ご意見を聞いたことがあるんです。

丸山 結局、先生は何といわれたの。

前田 「そう思うが、資料がないね」とおっしゃってました。そのことがどうかわかりません。私は、地域別生命表、特に都道府県別生命表なんかは、ちょっと誤解を与えたり、どうもあの数字をあのままうのみにされると、施策上いろいろ困ることが将来起きるんじゃないかということ懸念しておりましたので……。

丸山 それは近藤正二先生の長寿者率の問題も同じことだ。だから、水島治夫先生のいまの府県別生命表の基本的な問題と、近藤正二先生の長寿者率の基本的な問題は、共通した欠陥があるわけよ。そういうものを踏まえてやろうと思ったら、どうしてもコーホートの問題と、人間が動く行動範囲の問題が出てくるな。

前田 社会移動ですね。そこでしっかり押さえなければいけませんね。

丸山 そう。まあ昔だったら、人間は動かないものだったんだ。動いたって、行動半径というものは、村の外に出ないとか、県外に出ないとか、国外に出ないという程度だったからそれでよかったけれども、いまはそうじゃないしね。

前田 だから私は、むしろ国別なら、もちろん国間の移動もありましょうけれども、これはある程度無視できま  
すから、むしろ国ごとの比較……。

丸山 きみのいう国というのは？

前田 日本とか、まあアメリカの場合はまた白人と黒人  
で違うかもしれませんが。

丸山 そうなんです。だから、そういう大きな問題の  
ときに、そういう現象に何が一番大きなファクターであ  
るかということを知ろうとしないで、つまり、その点を  
はっきりさせて研究を進め、ある時期に確信を得るよう  
な方向でやるのではなく、形式的にずっと流していつて  
しまうと、それは間違った結論が出てくると思う。

それで私は、「生命表」の問題も、ゼネレーション・ラ  
イフテーブルというものは、どうしても一遍やっておか  
なければいけないことだし、これは日本の場合だったら  
国勢調査時がずっと連続してできるから、それで澁脇学  
君に頼んでやったら、あのときの資料というのは、いま  
ないだろう。あれ、どんどん継続してやってくればい  
いんだけど、あれで終りじゃないか。だから、日本  
におけるコーホート・ライフテーブルといたら、澁脇  
君たちにやっていただいたあの仕事だけじゃないのか。

それで私は飯澁君に頼んで、コーホート・ライフテー  
ブルとカレント・ライフテーブルとの照合ということ  
やってほしい。そうしたら、私の目の黒いうちにはとて  
もできないけれども、いまからやっておけば、少なくと  
も150年もすれば可能性がある。私は、そのときには全  
部その当時までのやつをやっておいだから、その仕事を  
全部彼に渡したんだよ。

前田 福島大学のですか。

丸山 いえいえ、いま琉球大学。

前田 前は福島大学。

丸山 あれは南条君。

前田 ああ、南条さんですか。いま琉大ですか。

丸山 琉大。だけど彼、衛生学者だもんだから、いろんな方面に興味を示しておって、あれもまだ完結していないけれども、このごろは日本でもコーホート・ライフテーブル的な考え方で、東大あたり、一生懸命やっているね。

前田 ですから、さっき先生からのご質問にお答えしたように、私は地域別についてはそんな問題に関心を持っていましたから、先生のご意見を伺ったのですけれども、必ずしも明瞭なお答えは得られませんでした。そのとき、ちょっと体調が弱っておられましたしね。

丸山 私もお話を伺おうと思ったけれども、ベロの方も、それから体の方も弱っておられたから、ついに聞くことを逸しちゃった。だから、年寄りというのは、健康なうちに、聞き出すことは何でも聞き出しといた方がいいよ。

そういう意味じゃ、今度の企画なんというのは、私は非常にいいことだと思う。もう私自身がそうなんだから、聞いときゃよかったと思うことが幾つもあるんだけど、もう間に合わない。

前田 先生方も、皆さんそれぞれ、あれもこれもやりたいと思いながら、お忙しいでしょう。

丸山 できないね。

前田 ですから、こういう機会に「先生、伺います」というと、いやでもおうでも少し資料を再整理しないと、

話をしてくださらないので、整理のお助けにもなるわけです。そういう意味では、むしろ感謝していただきたい。逆かもしれませんかね。(笑)

丸山 いや、ほんとにありがたい。

水島治夫先生は、全くあれは、私は追悼講演のときにもいうたんだけど、ああいうスタイルの教授生活のできる最後の教授じゃないかね。

それで、33年かな、統計調査部から阪大へ来て、すぐその4月かな、「今度秋に公衆衛生学会があるから、そこで特別講演やってくれ」と頼まれてね。「特別講演なんて、そんなことできるわけない」といったら、「いや、きみのやった乳児死亡の話をしたらそれでいいんだ」という。私の乳児死亡の研究というのは、戦前の研究でしょう。報告は、重ねてはやっているけれども、まとめて話したことはない。それをやれというわけだ。

それから、水島治夫先生とは、戦後すぐ始ま、た人口動態統計改善委員会ですっと一緒でしょう。渡辺定先生だっけ一緒だから、私のことはよく知っているわけだ。そういう意味では、期せずして私がライフテーブルの問題で古い原稿を見せたんだけど、これは小倉金之助先生の歴史的な問題提起の仕方に関連があるわけです。

水島治夫先生のは、すぐ直接的に数理的に問題をデータからやっているわけでしょう。ところが、歴史的発展の経路というのは、地域的にうんと違うわけだよ。あれはあのままでいいんだよ。

それから、いまきみの指摘したように、その人の人口の移動が均一に、どこも同じように、あるいはもうアトラダムになっていけばいいけれども、それが凝縮してい

るんだよ。それが私の乳児死亡の研究の中で明らかになった。これじゃもう赤ん坊のときにそうなんだからね。

私みたいに、子どものときから日本を方々歩いていると、「一体私のふるさとはどこですか」ということになるでしょう。そういう連中がだんだんふえてくる近代社会において、地域政策というときのその地域性はどう影響するか。昔のような地域性とは違うわけだよ。だから、「あなたはどこのお生まれですか」なんて聞いてみたら、私ら返事のしようがないわけだ。私は「日本です」という。(笑)

前田 もう一つは、先生なんか、もし地域別に分解してライフテーブルの計算をする場合に、値そのものも有用かもしれませんけれども、がたがたその地域の特性を、やっぱり地域の社会変動や何か全部調べて、それとクロスをして、それから行かないと-----。

丸山 だからそれを、「実験的にそういうものが非常に大事です」といったのが、私の乳児死亡の類型分類ですよ。あの類型分類は、初めから9つしかできないんだからね。

それから、岸和田における学校の校区別の分類。これは行政的に、教育は、その地域の人はその小学校に行くことになっているんだから、そうすると、岸和田における乳児死亡の問題というものを校区別に分類して、その歴史的な発展を見れば、そこで生まれた子どもはその小学校に行く。

それから、岸和田市の人口の構造が、岸和田で生まれたというのは、じいさんもばあさんも、ひいじいさんもという本籍人口と、親が岸和田に来たという移入人口の

違い。本籍といたって、このごろはどんどん移すけれども、昔のことだからね。それで出すと、きれいにその特徴が出たでしょう。

だから、ああいうふうに地域と時代と人間の流動性というものを見ないで、そして諸状況の変遷も産業の動きも見ないで、ただ抽象化されている年齢別、男女別、地域別の人口構造だけで論議しておっただけでは、私はいけないと思う。そいつの典型的なものとして、乳児死亡のごときのものでさえもこんなにきれいに出るんだということを出したわけよ。

前田 だから、ある意味では一般論的になるかもしれぬけれども、統計の実際利用と申しますか、データの実際の観察と分類ということを、もっとみんなが研究し、勉強し-----。

丸山 そうよ。だって、科学の最初は分けることよりないんだもの。いままではそいつを何か惰性で、こう分けてあるからそれを使っているだけなんだ。

その中で一番問題なのは死因ですよ。だから、どこかに書いてあるでしょう、私の死因分類の歴史を。それがだんだん細かくなってしまい、わからなくなるのよ。

それで一番大きなのは、乳児死亡の場合だったら、これは赤ん坊が生まれてからでも予防は間に合うものか、生まれる前からやっておかなければ間に合わないものかということがはっきりしているんだから、それを出している。

そして、それを数字でわからせるんだったら、アルファインデックスが小さければ小さいほど、これはお母さんの側に大きくウェートを置いて対策を講ずれば成功す

るであろう、大きければ大きいほど、それはお母さんもちろんだけれども、子供の保育、養育に関係があるから、そういう点に重点を置いたって間に合う、こういうことよ。ただそれだけよ。

それで、資料で、外国には家庭の生活状況の分類というのはあるけれども、日本にはないものね。

前田 先生もご存じでしょうが、私が統計調査部のある程度責任あるポストについて、ある時期、ああいう二次統計というものの悲哀を感じましたね。残念ながらオリジナルに取れないわけですね、あれは。要するに、法務省の戸籍法に基づくいろいろな届書がまずあって、ある時点からスケジュール・カードに転写をして、そこから人口動態統計が始まるわけですね。ですから、本当は職業の、生活歴史的なものも必要であるかもしれないし、さっきいった人々の移動の問題も必要なのかもしれないですね。

丸山 その問題は、私らが人口動態改善委員会のために、すでに問題にしてはきておる。

前田 そうですね。ところが残念ながら法務委員会とか法務省で、「あれは身分法であるから、そんなものを入れるのは行き過ぎである。現在でさえも多過ぎるのだ」……。一時はあれをカットしようという動きがありましたね。残念ながら、われわれはこういうものが欲しかったけれども、それを入れるどころでなくて、カットされるのを防ぎとめて、少なくとも当初の姿を残すのに精いっぱいだったですね。ああいうことを考えると——かといって、あれを一次統計で最初から取ることはできないかもしれないけれども、そういう努力はやっぱりしないと、

本当に必要なものが、情報として取り得ない状態ですね、いまは。

丸山 ですから、結局私が繰り返していうことは、統計を取った連中にはプラスになるけれども、統計を取られた連中にプラスにならないような統計調査をしたって、統計に協力する人は出てこない。そうすると、それは結局そういうものが必要だということで、調査者と被調査者の間に、信頼関係と目的意識の統一がなければだめだ、一方的ではダメだということ。

それで、それにはやはり調査される人に一番身近にいる人で、その両方の意図というものを統一するようなポストがあるといい。それは、保健問題に関する限りでいえば保健婦だというのが私の考え方だ。

だから、保健所において公式な統計調査もあるけれども、訪問調査というものは、訪問される家庭の問題を総括して、保健所の地域における政策を出すのが保健婦だからね。それで私は、保健婦の教育、その中でも統計調査とか、事例調査とか、要するに調査という問題を重要視したんで、それがずっと私の統計的な研究調査の基底をなしているわけだ。そして最終的には砒素ミルクの問題もそれよね。

その前には、戦時下における子どもたちがどうなるかということも20年、ずっと調査をしたよ。それで見てみると、やっぱり私の考えは間違っていないということがますます明らかになったね。

でも、人がかわってもいけるというのは、やっぱり行政機構だと思うのです。それが保健所だと思うんですが、その保健所の資料の保管とか利用という点は、残念ながら

ら全く下手くそだよ。大学の方はまた人手がないから、これもうまくいかぬわね。そうすると、公文書保管とか、そういうことが問題になる。公文書だと、これは保管する義務がありさえすれば、いつまでも保管されるからね。

そういうことなども、今度アメリカに行つて、お金と人手と組織でやればあんなものはできるからということがわかった。後でごらんに入れますわ。

前田 それはまた後で拝見します。

前田 ところで、先生が厚生省へお見えくださったのは昭和25年でしたかね。

丸山 そうです。

前田 ちょうどあのとき菱沼従尹さんから、「いいかげんな人間に頼むわけにいかぬから、おまえ、丸山先生にいろいろ連絡せい」といわれて、先生は覚えておられないかもしれませんが、先生にお手紙したり、先生の処遇の問題なんか人事課と交渉したり……。何とか先生に、もう少しちゃんとした処遇をと思って努力したけれども、先生としては恐らく釈然としなかったと思うんです。(笑) 少なくとも菱沼さんにいいつけられて、先生にお手紙して、そちらの方の連絡をとらしていただいたのは私だけ、たんです。

丸山 本当に世の中のつながりというものは不思議なものだね。

前田 そういう意味では、先生が厚生省へおいでになるときの連絡役を私がやっていたんです。

それで、丸山先生もしかり、安藤鎮正さんもしかり、小沼正さんもしかり、私はまだ若かったですから、非常

に悲憤慷慨して、「人を遇する道じゃない。役所というのは、人を遇することを知らぬじゃないか。私を含めてそうである」ということでもめたんですけれどもね。(笑)

そのとき私は軍服を着ておったですから。高等官食堂で飯食っておったのが、役所に来たらいきなり判任官になっちゃって。でも、一番の新兵ですから、それはいいんですけれどもね。(笑)

それで、25年にお見えになって、阪大の教授に戻られたのが33年ですから、足かけ8年おられたんですね。まだ余り口をでっかくして官庁統計の悪口はいえないかもしれませんが、8年間おられて、先生ずいぶんいろんなことを提唱されたけれども、それが成功しなかったとかいうことは、ぼつぼつおっしゃっておられるわけですが、それを少し-----。

時間がたちましたから、ここで少し休憩させていただいて、休憩後に、官庁統計を批判するというやつを思う存分おっしゃってください。まずいところがありましたら、後でカットします。(笑) 私もいいたいところがありますから、少し先生と一緒に官庁統計のあり方について——私もいまは退官後ですから、国家機密の漏洩にならない程度でひとつ-----。

丸山 国家機密というのはないんだよ。知る権利というのは主権者が持っているんだから。

前田 先生そうおっしゃいますけれども、国家公務員法を読むと、国側が、これは国家機密に属すると判断した以上は、われわれは終生国家公務員法の適用を受けますから。それ自身のいい悪いは別として、現実には-----。

丸山 だから、それが法的論理のごまかしよ。

前田 かもしれませんがね。

前田 それでは引き続いて、昭和25年から33年まで、厚生統計の場におられましたので、私など、確かにおりましたけれども、まだ若輩でしたし、先生がかねがね口へのせられる人口動態改善委員会などというものにも出席しておりません。官庁統計の場におられて、どこにネットワークがあったか、あの当時はどんなことが議論されたけれども、司令部のためにそれが実現できなかった、あるいは、他官庁とのいろいろな関係もございましょう。

そういう中で、丸山先生がどんな問題意識を持たれて、どんな提案をされたか。そういう改善委員会などでどういことが議論されたか。どういことが日の目を見なかったか。それが、いまになって考えれば、大変残念だったことなのか。考えてみれば大したことなかったのか。その辺、少しく思い出話的にお話いただければありがたいと思います。

丸山 「統計学」第6号、1958年4月、「戦後日本における統計の諸問題」の中で、人口動態統計について、私の分担で執筆したのが、統計調査部にいるときです。これが最後に書いたものなんです。

前田 阪大に戻られる直前という意味ですか。

丸山 そうです。要するに、このことが、いまのご質問にある、人口動態統計に関する私の、戦後に関係した問題点を整理したものです。実はこれは、調査の方で、調査史としては一応終わっているけれども、それをどういふうに発展させ、活用させたかという統計利用の部分には全然触れていないんです。いまのお話だと、そっち

の方が重要のようだけれども、残念ながら、それはまだ私の頭の中で資料を整備して、お答えできるようなところまで来ていません。

そのときの結びは、「統計の作成から利用へ」と書いてあるわけです。

要するに、人口動態統計の調査制度の大変革が行われたんだから、それに見合ったような厚生省の統計調査部の機構がどんなふうにといいのには、君も私も、その渦中の人物だったわけです。

そのときに一番問題だったのは、日本の官僚機構と予算機構から、国全体のアメリカレベルの統計的な要求にはこたえられるかもしれぬけれども、被調査者である国民の、小さな地域の特性に応じた行政指導というものが、国民福祉に直接効果のあるような、政策の事実であるとか、行政の企画であるとか、あるいは、行政効果の判定であるとかいうのに利用されるところまでは行ってなかったと私は思うのです。

しかし、私自身は、統計というのは、生活の改善のために役立つ算術と考えているから、それをやりたかった。統計というのは、民主主義社会において初めてできることであって、民主的に国民が高められれば高められるほど、人口動態に対する関心は大きくなり、政府統計についての関心も高まり、そして、それにつれて合理的な施策が講ぜられたかどうかということの判定もできるし、またその予測もできる。それを国民も知ることができるといところから、戦後初めて、各省に統計調査部ないし統計調査局ができたんだらうと私は思うのです。

ところが、そうはならなかった。結果的に国民全体に

それが普及したかという点、そうではなさそうに私は思うのです。

前田 先生が期待しておられたほど完全にはそうではなかったかもしれませんが、市町村からダイレクトに県に来、それが統計局に来て、集票されて発表されていた時代に比べれば、保健所を通過し、死亡個票をつくらせて、その死亡個票を見ながら、地域の保健衛生、死亡率のようなデータをいち早く地域が知って、それを保健所行政の中で、乳幼児の問題、母子保健の問題、あるいは結核の問題、当時非常に問題であったそういうものに、統計情報としていち早く活用させるという仕組みに変わったということ、先生がお考えになったほどの成果は得なかったにせよ、方向づけとしてはよかったですんじゃないでしょうか。

丸山 それはもちろん。

前田 また、それだからこそ、森田優三先生が、統計局長をやって、ご自分の所管事項でありながら、それを厚生省にバトンタッチされた意義もあつたんじゃないでしょうか。森田優三先生が統計局長……。

丸山 違う。その前の段階だよ。

前田 だって、実際に移管が行われたときは、森田優三先生は、局長をおやりだったんじゃないんですか。

丸山 そこが転換期になるわけだ。私たちの時代は川島さんだった。

前田 ああ、そうですか。

丸山 それで、こと人口統計に関する限りは、厚生省の人口問題研究所。それから、統計調査部、統計局、これがどっちかという点、数ある行政マンではなくて、統計

に対して非常に理解のある専門の、むしろ学者的な経歴の強い先生たちがヘッドになった。これはやはりその重要性が認められ、その要望があったからだろうと思うのです。

前田 当時の人口問題研究所長は、岡崎文規先生ですか。

丸山 総務部長は館稔さん。実質的には、昔の人口問題研究会の時代からだから、館さんあたりから、人口統計や人口学会の方向づけについて、一番最初に-----。

前田 いつかちらっと話をされておった、あることについて、森田優三先生も同意見だったけれども、それは残念ながら目の目を見なかつたよとおっしゃったことがありましたね。

丸山 それは、内容は生年別死亡統計。それから、満歳ではなくて数え年。だから、たまかなことは、日本の風習からいくと、生まれ年の方が、満歳よりも一義的に決まるから、一義的に決まるものを統計の基礎にするということの方が、年々歳々変わっていく流動的なものよりは、一遍出れば、それは動かすことができないものです。それがカレントにずつとながっていけば、その方がいいというわけですよ。

日本帝国人口動態統計-----。

前田 「日本帝国統計年鑑」。

丸山 それもそうだけれども、「人口動態統計書」、たしかそういう名前だったと思うが、それには両方出ておったのよ、昔は。生年別と死亡-----。

前田 「人口動態総覧」ですか。

丸山 普通の大きな-----。

前田 「年報」ですか。

丸山 「統計表」だよ。

前田 「帝国統計年鑑」は知っていますけれども……。

丸山 人口だけのやつ。いまは……。

前田 いまは、人口は「国勢調査報告書」であり、人口動態は、「人口動態統計年報」です。

丸山 ああ、そうですか。その前身です。

あれは全部満年齢に換算しちゃうから、換算事務が大変なんです。だから、「あなたは何年生まれ」でいい。小さいときには学齢の問題とかあるけれども、年を取ってから、1つ違ったとか、2つ違ったって、どうということはない。

それから、統計の年度と会計年度が違うでしょう。だから仕事の点で、人口動態統計にしても、人口統計にしても、死亡年のときに年齢別に分ければ、その年齢別は、出生年との関連だけで常にわかっていくようなやつで結構だ、その方がいいといったんだけど、GHQの方は、満年齢でなければいかぬとって、満年齢だけにしちゃった。いまは満年齢でしょう。あれは手数がずいぶんかかると思うし、間違いやすいと思うけれども、どうなの。

前田 大分なじんできましたから、現在はそれほどミスもないでしょう。しかし、先生のおっしゃる意味のことは、データの的には少しずれますからね。全くイコールじゃないです。

丸山 コーホートの考え方のときに、また計算し直さなければならぬ。

前田 それはまさにそうです。

丸山 だから、古い統計の計算し直しをしないでも済む、それこそほとんど永久につながっていくような、経時的

な比較のときには、昔どおりの方法でやってくれた方がよかったと思う。だけれども、アメリカ流の考え方だと、日本のいままでのやつをストップ。じゃ両方を出してくれといったら、それはめんどうくさいというわけです。これが1つの残念なことです。

前田 いまのようにコンピュータ集計の時代であれば、両方出すことはそれほど苦痛じゃありませんけれども、あのころはまさに人海戦術で、人手集計でしたからね。

丸山 それからもう一つ、原爆被害者の問題、亡くなった方たちのはそのままストップだけれども、被爆者の問題を、今後継続的に見ていくのには、いまの時点において、国勢調査時には必ずラベルする。それから、人口登録のときもラベルするというのを、早くやらないと、後になつたらわからなくなっちゃう。トラブルが起きるということを提案して、これは日本人委員が全部賛成したんです。ところが、フェルプスがかんとしてオーケー出さなかった。

だからあれも困ったことだと思っただけど、それは、彼らは、軍の占領政策上、そういうことはいかぬというわけでしょう。ABC C自体がそうです。日本には知らせないで、向こうに知らせている。それは残念だった。もしあれが確立しておれば、もう35年になるんだから、原爆に関係して、日本の人口動態統計の意味が、世界的に、もっともっと有力な発言をできると思う。

前田 そうですね。

丸山 きのも話に出た、東大の推計学の増山元三郎君らの爆心地の問題、ああいうことができるんだつたら、今度はラベルしたときにそれと結びつければ、すばらし

い実験的研究ぐらいの成果が、ただ登録することだけで  
できるわけです。それができなかったのは残念ですね。

それから、死亡統計のときに、職業登録をすることにな  
っているが、子どもには職業がない。だから、子ども  
のときには親の職業を書かしたらいいんです。子どもに  
限って、職業がないのはあたりまえなんだから、職業欄  
があいている。そこに親の職業を書かせればいいという  
んだけれども、それもダメだという。

前田 GHQがですか。

丸山 うん。

前田 それはどういう理由なんですか。

丸山 死んだ人の職業だからダメだというわけです。

前田 そんな単純な理由ですか。

丸山 それは単純な理由だよ。

いろいろな理由をつけていえば、死因の方は、その前  
の死因、その前の死因となっていくけれども、職業は、  
きょうの職業とあしたの職業は違うようなあの時代でし  
ょう。それから、昔の日本の職業の定着性と、変動期に  
おける職業の定着性はまるで違う。だから、アメリカ的  
な感覚からいえば、職業なんていうものを、子どもの親  
の職業まで考える必要ないということでしょうね。

前田 しかし、職業の混乱というのは、戦後のほんの一  
時期で、日本の職業履歴は、かなり定着性高いでしょう。

丸山 そうですよ。よそよりは高い。

前田 終生雇用の形をたちまちとりましたからね。

丸山 そうなんです。そういう意味で、子どもの死亡に  
ついて親の職業問題に対する追求ができなかったのは、  
私にとって、資料の整備という点では残念だった。

結局、ここにも書いてあるように、調査票を変えることから事務が動いていった。目標が決まってから調査票じゃない。アメリカの占領政策下における統計制度の変更というのは、調査票のことを先にして、それからその集計票ということだから、調査事務の方が先行していったわけです。全体の中でいえば、厚生行政に直接役に立つ、迅速性が問題だったわけです。それは一応成功したんだけど、そのときに、厚生統計の将来を考えているつもりなのれわれの意見は、そういうところで崩されたわけです。

そこで、その当時の議事録から引用したのがある。この議事録は、英文と日本文と両方つくりました。公文書図書館あたりに保存されておれば、それをごらんになると、非常に参考になる。

前田 そのときの委員会の正式名称は……？

丸山 何遍も変わりました。通称「人口動態統計改善委員会」というのが、最終的な名前ではなかったかと思いますが。第1回は21年の7月8日で、そのときは「人口動態に関する委員会」という名前だった。

前田 それは、さっきおっしゃった4者構想ですね。厚生省の統計調査部と、総理府の統計局と、厚生省の人口問題研究所と、司令部ですね。

丸山 それは、最後にそういうふうになっただけのことです。

前田 組織別にすると、最初はおおよそどんなメンバー構成なんですか。

丸山 厚生省は、斉藤技官、小沢事務官、横田技官、瀬木技官、館技官、野辺地技官。司法省民事局は、原第二

課長、赤塚事務官。内務省警保局が橋本事務官。地方局は金丸事務官。統計局は、川島局長、福永人口課長、友安審査課長。民間側としては、渡辺定さん、吉岡博人さん、水島治夫さん、森田優三さん、それと私です。

ここで見ると、私なんかこんなところに引、張り出されたということは、考えようによっては、日本の政府機関の公務員制度から見ると、破格も破格ですね。私が大阪府の統計課だったら話はわかるけれども、労政課だもんね。私はただ、一介の衛生統計研究者、乳児死亡研究者として参加している。

前田 地方代表というような意味だったんですか。つまり、地方の行政官で学識経験者ということですか。

丸山 違う。スペシャリストとして。

前田 やっぱり乳児死亡なんか、一連の研究を続けて……。

丸山 そうそう。だから、館さん、渡辺先生、水島先生、吉岡先生、それから私が、一群のカテゴリーに入るでしょうね。

前田 それから、経済統計学者という意味の森田優三先生ですか。

丸山 そうそう。民間側というのは、学会側ということですね。あとは行政当局。

前田 川島先生は、森田優三先生の後なんですか。

丸山 違う。森田さんの前よ。

前田 川島さんの後で森田優三さんが局長されたんですか。

丸山 そうです。

前田 そのときは、人口動態統計は、まだ内閣統計局の

所管だったわけですか。

丸山　そうです。

前田　そういう改善委員会で、いろいろ改善すべきところの話が大体詰まって、そして、総理府統計局から厚生省への移管が行われたわけですね。

丸山　それにはいろいろなことがあるんです。それはここに書いてあるし、その渦中の人物として、私たちが統計局人口課の囑託になった。私は、いまの議事録をもとにしてこれを書いているから、これをお読みになると全部わかる。

前田　1958年「統計学」第6号ですね。

丸山　本稿執筆当時、1957年12月は、筆者は統計調査部に勤務。

前田　お書きになったときわね。

丸山　書いたときは。

実は私は、こういうことも、統計調査部の人やらなければならぬ仕事だと思っているわけです。しかし、いまの統計調査部の人、統計調査部の人にはこんなことをやらなければならぬと考えるかどうかは、私は知らない。少なくとも歴史の流れの中において、いまの時点における記録を継続させるということは非常に大事なことで、たまたま統計学会の50周年記念というので君が見えたけれども、50周年だからやるんじゃないで、行政当局は、毎日毎日それをやっているはずなんです。

前田　そうでありましょうけれども、残念ながらそれがなされてなければ、何かのきっかけにやらねばなりませんね。

丸山　そうそう。そういう意味じゃ、思い出したり、整

理をさせていただいたりするのに、私には大変よいきっかけになりました。

衛生統計連絡協議会の第1回議事録では、「人口動態統計を、行政上活用する責任は厚生省にある。さらに、この活用は、公衆衛生行政の第一歩である衛生統計は、特に疾病統計制度の確立こそ必要であるということから、人口動態統計の改善の次には、これをやらなければ画竜点睛を欠く」ということで、第1回の会議が、昭和22年4月1日午前10時、厚生省の地階会議室で、公衆保健局の飯島調査課長の大会のあいさつで幕は開かれた。そのとき、斎藤厚生次官は次のようなあいさつをした。

前田 そのときの斎藤厚生次官というのは、斎藤邦吉さんですか。

丸山 このときはもう、森田統計局長、司法省は原第二課長、公衆保健局長は三木さん。斎藤厚生次官というのはどの斎藤なのか、覚えてない。

前田 亡くな、た、厚生大臣の斎藤さんですかね。

丸山 ここで、飯島課長と私の身柄のことについて、私は、内閣統計局人口課の囑託。こっちは厚生技官。そして、当時は、労働基準法ができる前段階。それで、私は労政課、そういう時代だった。

前田 大阪府のですね。

丸山 大阪府の。大阪府のそういう身分と、内閣統計局人口課の身分と、厚生省の新しい組織下のポストの身分と、私の体を入つ裂きにしなければならなくなった。そこで私はついに、大阪にとどまって、労働衛生をやることに決めただけです。

それで、君たちに連絡の始まった昭和24～25年段階は、

22年から、朝鮮事変の前段階で、アメリカの労働政策が変わった。そうしたら、私は初めは、アメリカの手先になってやる仕事よりも、直接日本人のためになる仕事の方がいいと思った。だから労働衛生をやったんだけど、労働者のためになるはずの定期健康診断は、法律の趣旨とは違う結果、労働者の生活に影響を及ぼし、結局使用者側だけの利益にとどまってしまった。つまり、労働者の休職から離職、解職につながっていくのでした。厚生省で、統計問題の基礎がために、私みたいなのも働かしてやるというんだっただからというので、いまからでも採ってくれるかという話で、君らのところへ行った。そのときには、曾田さんが統計課長。

前田 衛生統計課長。25年は、大臣官房の統計調査部になっていました。

丸山 そうそう、なっていたね。25年は部長だ。私はもっと昔から知っている。それで、課長時代から、どうしても強化しなければならないことになって、人口統計を引き受けなければならないという話も聞いていたし、私がそこでもし働けば、内閣統計局の人口課に身柄がありながら、それをこっちの方に移すなんていうややこしい渦中に入っちゃう。それは私はいやなことだから、この際きっぱりというのが昭和22年段階の私の立場でした。

25年になっては、私自身もう気持ちがあっさりしちゃって、曾田さんのところであればやれるというので、あなたたちとの関係が生まれたわけです。

前田 あのかきは、統計調査部はまだ3課制度でしたね。指導課と、計析課と、製表課。

丸山 そうそう。

前田 先生は計析課に着任されたわけですね。

丸山 そうそう。

前田 それで8年間-----。

丸山 まる9年、足かけ10年です。

前田 人口動態の話はそのくらいにしておいて、先生がお出になったころは、統計調査部の創業期ですから、いってみれば、厚生統計のいろいろな調査が次々と発足していったわけですがけれども、ご記憶では、どんな新しいものがそこに整備されましたか。

丸山 厚生統計協議会で、君たちと一緒に、計析の部長室でかんかんがくがくやったね。私は、皆さんが熱心で、みんなの力が結集して方向づけになっていることについては、あまり頭を使わなかった。だって、その人たちは一生懸命なんだから。私はその間隙で、私が補完をしなければならぬ問題に頭を使うわけです。だから、ある方針が決まったり、ある任務が決まったりして、もう布陣されてしまった後は、聞かれればいう。あまりよけいなことをいう必要がないというのが、私の態度だった。

あの中で1つ覚えているのは、統計表を横書きにするか、縦書きにするか、あるいは、用紙の縦横どちらを使うかということ私を問題にしたのを、君、覚えている？

前田 覚えています。

丸山 いまにもつながっている縦書き、横書きの議論は、戦争前からあった。それはまた別の項目のときに話をしたらいいと思うけれども、結局、私の予想と私の実験で証明したんです。調査票の書き方はだれが決めたのかな、

そんなことがあった。

前田 それは調査票ですか。

丸山 調査票の全体の問題。

前田 横書きで縦に流れている。1項目1項目は横に流れている。

丸山 そうです。縦横どうしようかというので、いろいろ議論しておいた。

私はいまでも観察を続けている。だから、30年以上です。正月の年賀状を分析するんです。その結果は後でごらんに入れますけれども、そういうことを統計学会でいうても、私がなぜこんなことをやっているのか、おもしろいことだと思える人がおるのか、おらないのか、それもわからないんです。

こういう発想は、東洋人だからできるんであって、西洋人にはできない。なぜかといったら、西洋人は横に書くだけで、縦に書くことを知らぬ。だから、人口動態統計改善のときには、縦書きと、横書きと2つあったでしょう。統計学会の雑誌だって、戦前の「年報」は縦書きの雑誌と、戦後の「会報」は横書きの雑誌とあるでしょう。あの当時には、辞令は縦書きだったのが横書きになったでしょう。縦のものが横になったり、横のものが縦になったり、おもしろい時期だったね。

「縦書きと横書きの心理的統計的法則性について」(日本統計学会会報 1954年版、1955年版、1956年版所収)

前田 ちょっと話がかわりますが、先ほど先生のお話の中に出てきた増山元三郎先生は、推計学を盛んにおやりになっているわけです。一方において、川上理一

先生初め先生方の物の考え方が大分お変わりになった。その川上理一先生と、増山元三郎先生との橋渡し、という表現はおかしいかもしれませんが、何かをご一緒にやるという努力を、坂本竜馬的な役割りを演じられたというお話をちょっと聞きましたけれども、その辺はどんなことがあったんでしょうか。

丸山 増山君なんかは、われわれの実務的な統計協議会へは全然呼ばれない。しかし、彼のような新しい考え方は、われわれ、学ばなければならぬ。川上先生というのは、公衆衛生院で、統計学部長です。日本における統計学の発展において、新しく人口動態統計が整備され、厚生統計が整備されていく中で、そういう方たちにどうしても話し合いをしていただかなければ困るわけです。それで、私はお2人に、われわれの意のあるところを話したんです。それは増田さんも了承の上の話だけれども。そのうちに私が病気で寝込んでしまって、それで終わり。川上先生は生物統計学会を興され、その後長く機関誌を発行されたんです。

前田 増山先生は物療内科かなんかになっておられましたね。

丸山 そうです。医学部門で、彼ぐらい実験的な統計、要するに、実験方法の中に統計を導入して医学的な問題を考える。それから、いまの原爆被害の問題だって、ああいうふうなことができるということ、実際に示されているわけでしょう。ああいう方たちの能力を、衛生統計や、医学統計や、人口動態統計にもっともっと入れなければいけないというのが、そのときの私の気持ちだったわけです。それから、従来の古典的な方法としては、

川上先生のように地道に積み上げていく方式と、両方活用できるように、われわれを指導してもらおうという考え方だったわけです。

一方、経済統計研究会は、統計学の若手の研究者の諸君がやっている。正木千冬さんは、統計局次長だったです。それから、一橋大学の松川七郎さんのような仕事をしておられる方たち、それから、私たちがみたいに官庁で実際に統計の仕事をしている連中、学者と、われわれ実務をやっている人たちが交流することによって、学校の教壇、あるいは、研究室だけでやっておられる問題と、現地でやっている問題とが一緒に研究の課題になれば両方が利益するから、やらなければいかぬといって、「統計懇談会」をつくったんです。

前田 経済統計研究会ですか。

丸山 そうそう。

ですから、厚生統計については、増山流の推計学と、片一方は、バイタルスタティステイクというか、デモグラフィックというか、バイオメトリーというか、あれが一緒になるんです。それは「生物統計学会」ができてしまって一頓挫を来した。

今度は、全体の統計学会の問題からは、新しい経済統計研究会と、古い統計学会との関連をどうするか。それからまた、実務の中央官庁における統計政策も、實際を担当しているものと、研究一点張りの連中との間の間隙をどういうふうにして結びつけるかということが、私にとっては大きなテーマだったわけです。

いま、経済統計研究会ができて20何年たった。だから、一世代かわっているわけです。九州の方では、北川敏男

さんは、純粋の推理統計だった。林知己夫君なんか、一番生きのいいときじゃなかったかな。だから、時代が変わったよ。三猪君なんかも。もう統計局長を退官になられた川島さんは、国立国会図書館の考査室でしたかね。そこに勤務された。

前田　そうですね。専門員なんかおやりだったですね。

丸山　そこの名簿を見て、何か気がついたことがあったら-----。

前田　かなりの大家から、まだ本当に学生クラスまで、老いも若きもですね。

丸山　そうですね。それだけあの当時は、日本の行政統計の分野における生き生きとした時代で、それはアメリカの刺激があったということでしょうね。それをいかに伸ばすかというのが、厚生省の統計調査部の生き生きさとながらっているわけよ。

前田　これで何とかかんとか、といったら怒られますけれども、大方も時間ばかり伺ってきたわけですよ。

あと、ご経歴を拝見しますと、先生は意外に長く官庁統計なり、役所におられましたね。大阪府関係もありましたし、厚生省関係もありました。あの当時から、こういうことはこうあらねばならぬといろいろ思っておられたでしょうし、また現在もさっぱり変わっておらぬじゃないかというご批判もあるかもしれません。

官庁統計のあり方は、一口にはいい尽くせないかもしれませんが、官庁統計というのはこうあらねばならぬというご意見が、おそらくおありだろうと思うので、そういうご意見やら、いまの統計学会のあり方、統計学

会の定期大会のときに、こういうような会合の持ち方とか、あるいは分科会があるとするれば、こんなグループの分科会なども必要じゃなかろうかというようなことでもあれば、お聞かせいただきながら、先生が最近はこういうことを手がけているということ、折々話が出ておりますから、アールヴェーダ研究など承っておりますが、その辺を少し織りまぜながら話していただいて、だんだん結びにしていきたいと思います。

丸山 大きな統計事業というものは、分業でしかできないからね。だから、全く計算は計算、分類は分類、統計調査部のわれわれの統計調査の初めのように、要するに企画は企画、解析は解析、製表は製表というような大まかなところから始まらなきゃならないのはあたりまえだ。しかし、いままでは問題別の統計があまりに多かったわけよ。このごろは何かまた、問題別というか、行政別に来ているわけだな。そうすると、行政目的というときには、それが必要なんだけど、それがいつも同程度の進歩で結合されていけばいいんだけど、どちらかがダッと出ちゃって、片一方がツッとおくれたりしていると、これはもうややこしいことになるんだ。

あの当時は、厚生省の場合には統計原則的なものの方が先に出ていたんですね。いまはむしろ、行政目的的な方が先に出ているんじゃないかと私は思うんだけどね。そうすると、ランダム・サンプル問題だとか、あるいは有意抽出の問題だとか、あるいは全数問題だとか、統計調査そのものを第1次統計としてやるのか、第2次統計としてやるのかという問題が、当然考えられると思うね。ことに、行政統計の場合はそうならざるを得ない

でしょうね。調査が目的じゃないんだからね。そうすると、予算的な措置の問題が当然出てくるしね。

私がああ当時、考えて主張しておいたけれども、採用されなかったのがランダム・サンプル・サーベイの問題についての問題ですね。つまり当てがわれた地域の人たちは、それをもって自分の地域の仕事には役に立たない。本省に来て、全部集まったときには役に立つ。私は、調査されたところの人にもすぐ役に立つようなものであってほしい。そうすると、これは指導の甲乙があっても差し支えない、むしろそういうものを前提にして、仕事ができる、熱心なところはその熱心さがどうなる。不熱心なところは不熱心さがどうなる。それから指導力の強いところはどうなる。弱いところはどうなるということから、問題を行政的に点検していくという行政判定効果という方式をとることの方が、予算を使う点では有効じゃなかろうか、それはえこひいきになるというわけだね。それで、あれは行政の原則からいえばえこひいきだというので、私は引きさがった。

だけど、それは研究の姿勢からいえば、ある仮説を持って、その仮説を検証するのが、行政効果を判定する一番大きなものだと思うんだ。問題があるということはその問題の、さっきも出ていたゲノタイプ、フェノタイプの方でいえば、これは全体的なゲノタイプの問題の上に、みんなかかっているんだからね。そういう方にえり分けなけりゃ、ただ一般論でものをいったってダメなんだよ。そういうのは乳児死亡の場合におけるアルファインデックスの考え方なんだな。

ところが、そういうことをいっているんだけれども、

それは通じなくて、私の説得力が弱か。ただけかもしれぬが、いまはどうかね。

前田 基本的にはそのままじゃないんでしょうかね。一つの弊害は、私が現職時代考えていたのは、いまの予算編成と予算執行体制について、財政当局自身の頭が切りかわりませんと、要するに、いまの国家予算だと、たとえば1年休むと、その翌年は予算がすでにもう新規要求になるわけですね。新規要求というのは通すのが大変むずかしい。したがって、毎年毎年、たとえば調査費予算をとっていかなければならない。ところが、プランニングをして、実施をして、アナリシスをして、そして結果を見て、次の企画に入るためには、毎年毎年では時間的ゆとりがないですね。

本当は、たとえばことし企画をして、ことしじゅうに実施をすれば、翌1年ぐらいかかってゆっくり分析をして、それを踏まえて、次の新しい前進を見た企画をしていくというには、どうしても1年か2年あけざるを得ないですね。

ところが、現在の、予算で仕事をするような官庁統計のたてまえじゃ、それじゃ、やっぱりできないんですね。したがって、はっきりいうと、前の年の実績も問題点もわからないで、次の企画に入っているわけですね。その繰り返しというのは非常にむだのような気がするんです。

丸山 そのとおりなんだね。

前田 それから、はっきりいうと、財政当局はそう細かくわからぬわけですからね。たとえば厚生行政のために、たとえば農林行政のために、こういうデータがなければ

将来の行政政策は立たねだらう、こう判断したら、要するに、たとえば調査費1本くれりゃいいわけですよ。

丸山 それでいいんです。

前田 それを、何々調査費200万、何々調査費1000万と細切れですからね。それを使ったか使わないかということですからね。もう少しまとめてスポッと調査費をくれれば……。

ですから、どうも官庁統計の場合には、財政的なあり方までさかのぼらないと、1つの省だけで、なかなか基本的な解決はつかないんじゃないかという感じがしてたわけですがね。それじゃ、何でおまえ主任中にそれをやってこないかと、先生から怒られそうですねけれども。

丸山 いや、それは無理だ。それはやはり日本の財政機構並びに財政当局の政治的な重点志向だな、それが変わらなきゃダメよ。

それなんかよりもっとひどいのは大学の研究ですよ。予算というのは1年こっきりでしょう。1年こっきり1年こっきりだ。単年度予算だもの。あとは何か多年プロジェクト予算というのがあるけれどもね。その経年というやつは、1年ごとに実績を出さなければ、効果が認められないものね。10年後に初めてやっとなつたやつがこうなつたかというような研究なんか、だれもしなくなっちゃうものな。

前田 本当はしかし、そういう息の長い研究も必要なんでしょうしね。

丸山 私はそういうものを見通せるだけの目標と、それに耐えられるような研究者を必要とすると思うよ。そういう意味では、私は統計の仕事というのは息の長い仕事

であって、きょう、あすの波の上がり下がりの高さだけや、流れの強さ弱さだけで、ものを見ているんじゃないで、底流に対する見通しを、最高級の政治的な判断でやらせて、そしてそれを判断する。

だから、イギリスにおける総理大臣なんていうのは、植民地におけるバイタルスタティスティックもちゃんと見てるものね。ディズレリとかグラッドストーンなんという政治家は、そんなものをいつも机のそばに置いておいて見ておったという話は、うわさで聞いておるけどね。ところが、日本の総理大臣、どんな統計を見させているのかな。

前田 グラッドストーンなんかの語り伝えでは、「生命表」を見て、本当に腰を抜かさんばかりに驚いた。自分の国の国民が最後の一人まで死んでいくさまが、これほど明確に出たものはない。本当に気絶をしそうに驚いたというのが、逸話になって残っているわけですね。

丸山 それはファー（FARR）だとか、ああいう連中がいたからだね。

それほど人間の生き死にの統計というものが大事だというときに、われわれの周囲においては、親が死んだり、子どもが死んだり、友達が死んだりしているという事実、子どもはどんな生まれ方をしており、どんな育て方をしておるかということを知っておる人たち、この人たちの経験と、それから、いわゆる大きな統計の結果との間のギャップをどうやって埋めるかということについて、だれも考えてないのね。それではいかぬよというのが私の考えです。

そうすると、要するに官庁統計と民間における統計調

査というのは——ちょっと民間の統計調査というのは、お金がなかったらできないからね。そうするとフィールド・スタディーのスモール・サンプルの問題になるわけですよ。そういうときにも役に立つようなのが、乳児死亡の私の研究はその一つのテスト・サーベイだと、乳児死亡調査の一番初めに、私は書いていますね。

前田　そうですね。ですから官庁統計のいろいろ問題もあるし、あれかもしれませんがね。そうはいいながら、なかなかあれだけの規模で、あれだけの予算措置を講じながら、あるいはそれが全数調査でないにしても、全国的な規模での標本調査を実施できるのは、やっぱり官庁調査しかないわけですね。一つの大学、一つの研究所では、せいぜい小さなフィールドをつかまえた事例研究が、それに毛の生えた程度ですね。

そうになると、結局研究者や学者の人たちは、そういうところにもうちょっと顔を向けるといふか、と同時にもう少し、官庁統計をしっかりと使い得るようなものにしていかないと、むだ金使いになりますね。

だから、学会なんかも、もう少し官庁統計の問題も扱う必要もあるし、学会全体がやはりいろんな関係方面に働きかけて、こうあるべきであろうと。それは学会だけじゃないかもしれませんね。いまの統計審議会あたりも、もう少しそういう建策をされなければいけないんじゃないかと思っておりますが、間違いでしょうかね。

丸山　それでいいでしょう。ところが官庁では学者を遇する道というか、やっぱり自分の気心のあった人しか、委員会では採用しないものな。自分と反対意見の人を委員会に入れるなんという太っ腹の委員長はいないもの。

役所もないもの。本当はそういう人を入れて、その人の意見を聞いて、そして自分たちの意見を正々堂々と論議して、そこで落ちついたところで事をやるぐらいの腹が両方になければね。話がツーツーカーカーで、まるで予算流しのような話をしておったんでは話にならぬわな。

その点は、統計はすぐ結果が出るから、ほかの政策論議と違って、やはり統計学会と、それから官庁統計とは、人の問題でも、研究課題の問題でも、行政課題の問題でも、もともとと話がクリアカットで通ずる場面だと私は思いますよ。それには数字のことだから、それからやり方だけのことになるが、あまり感情を交えなくたって理屈の通るところだから、私はもともとと交流があっただけで済むべきだと思う。

そういう意味で統計学会に、学会というと大学とか、研究所の人たちばかりだけれども、統計関係の行政部の人たちが参加してほしいし、そうすると、いまの官庁の機構からいうと、1つのポストに10年、20年とおるのはなかなか困難だ。私は統計の係というのは、どんなに短くても4~5年はおってもらわないといかぬし、10年、20年、30年おって、それに値するような処遇ができるという機構にならなければ、統計マンというのは育たぬだろうと思うね。

私は、そのあれになれるかなれないか知らないけれども、10年がんばってみただけだけれども、やっぱり大学の方に引、張られたというのか、押し出されたというのか知らぬけれども、結果的には大学に迎えられた。私は統計の問題では、大学なんかではとてもできない、統計調査部以外ではできない大事な問題があると思っておった。

だから、もうこっちへ来てしまっただけからは、問題を統計から外しちゃって、むしろいまの教育の中で、一番大事な、欠けている問題というので、医学史の研究会をつかって、そしてずっと後で、衛生統計の研究会をつくった。前田先生は、しかし、いまいった大学の教育として、そうはいっても、私はやっぱり小学校——小学校じゃ早過ぎるかもしれぬけれども、せめて高校、大学では、もう少し統計を教育の場に、どういうふうに合わしたらいいんですかね。

丸山 それはやっぱり問題を論理的に科学的に把握し、そして評価するというのを、お金の問題だけでやっているようなことでは困るんだね。私たちとしては、それは生き死にの問題、生死統計というのかな、健康統計というか、厚生統計、これをもう少し見せることが必要だし、その端的な問題点は、家庭に直結してある子どもと親の問題、要するに母子問題だと思う。そして保健所の問題でも、最も行政上重要な問題は、やはり母子衛生だといまでも思っていますし、当時から、ずっと一貫して見ているわけ。ですから、保健婦についての、あるいは保健所についての統計教育というのは、もっともっとやらなければならない。

前田 それでは、これは多分お手元に届いていると思うけれども、来年の統計学会の50周年記念事業の中にも、統計教育関係教員の研修会、そこで現場の教育担当者と学会の所属会員との討論、研修、交流を通じて、要するに、教育の中に、どういうふうに統計を入れていくかということも一つ考えているわけです。

丸山 この点では、私はやはり先鞭をつけられたのは小

倉金之助先生だと思っね。「統計的研究法」というのは、医科大学の予科の学生を対象にして、教材をつくられたものですからね。それから岩波新書の最初の時期の「家計の数学」、私はあれをテキストなんかに使ったもの。あれはもうお母さんにもわかるわけだからね。統計的な思想の記録でしょう。

それから、いまの私たちのやっている過去帳からの問題だ、カリキュラムだったら中学生でできるものね。年賀状の問題なんかだったら、これはだれでもできるものね。こういうふうに身の周りのものについて、伝統的な考察がどんなに統計的な規則性を見つけることができ、そして、それが歴史とともに、どんなに変わっていくかということが確認できる。

このことについては、小島勝治が「子どもの統計学」という本を書いたんですよ。だけれども、それは出版に至らないで、原稿のときに行方不明になったのか、焼けたのか、実は統計学文庫というのが、戦争中に企画されたんですよ。そして第1巻、第2巻は出た。塚原仁さんの翻訳だったかな。あれは長崎の高商の先生ね。1冊はだれだったかな、3巻目に私の乳児死亡を載せるようにいわれたんだけど、それも戦争だか何だかどうどうダメになった。そのころ小島勝治君の方も、ぜひあれを出したいというんだが、それもダメだったね。そういういきさつは、小倉金之助先生の秘書というか、助手をやっておった大矢真一君が知っているんじゃないかな。いまはもう和算史、科学史の大家だけれども、彼がそういう点は詳しいな。

だから、日本における統計発達は、どういう紆余曲折

があったかということ、日本の事実について、身をもって経験しておる人たちの意見を聞こうということになって、こういうことになったんだからね。これはいまがチャンスですからね。私は経済学関係、水産統計なんかだあって、要するに、いろんな分野のベテランが統計的な方法を使ってますからね。その方面の現代的課題、将来的課題というのを聞くだけでも、私は役に立つと思うよ。何しろ水産統計の方だと、「漁獲高の推計」なんて、海の中のものを推計なんかするんですものね。

ですから、私は人間の生き死にの問題を中心にして考えているわけですよ。その中の中心は、ぼくは乳児死亡だと思う、相変わらずね。そして、やっぱり一番問題なのは、生命表的な考え方でしようね。

前田 いま先生がおっしゃった、先生ご自身の現代の課題、未来に対する課題を、最後に少しまとめ的に教えていただいて、長時間にわたるものを閉じたいと思います。おそらく、そこには先生が最近あれしているアーユルヴェーダ研究……。

丸山 だから、生死の問題になると、生死の量的な観察というのは、バイタルスタティスティックで出るわけですよ。そして、そのタイプというのはライフ・テーブルに出るわけですよ。そうすると、そのライフ・テーブルの初期状況というのは乳児死亡、その前はプレナータル・デスである死産統計ですね。ところが、死産統計というのはややこしい。いずれにしても、乳児死亡を見るときには、そのややこしい死産統計と常に見比べながらやらなければいかぬということ、急ってはいけません。

そうすると、死の問題は——生の問題はそこら辺でい

いんだ。生きて生まれるか、死んで生まれるかの1点だからね。そういう人口出生、要するに地域における人口出生、あるいは階級における人口出生、民族における、何でもいいんだ、人口出生という問題については、質的には私はもうずいぶん低下していると思うんだな。そういう具体的な実例は生殖力というか、出産力というか、昔は、女の人1人でお産ができたんだよ。ところがだんだん1人ではできなくなっちゃって、いまは病院でなければできなくなった。

だから、文化が進むに従って、健康状態がだんだん弱くなっちゃったね。このごろは胎児の異常というのが非常に問題になるし、こういう方面の問題がもう少しやられなければいけないんじゃないかと思うし、それはもう母親の、少なくとも妊娠中の問題として、1年間の観察というものが、もうちょっとあってもいいんだ。それからさらに、妊娠可能までの女性の問題、これがもっともとなされていいんじゃないかと思いますね。それは民族的比較の問題だ。

前田 これはどういう方ですか。

丸山 W・A・プライス、齒医者さんですよ、「食生活と身体の退化——未開人の食事と近代食・その影響の比較研究——」。未開種族なんていう、オレたちの方が先進文明人であって、あの連中は未開、未発達、開発途上国、こういう思想はもう間違いのもとやね。要するに、近代化ということは何かいことのように思っているんでしょう。それでここに、衰退の一途をたどる近代文明というのは、体の問題だけ見てもそうですよ、いま私のいったようにね。女の体自体がだんだん弱くなっちゃってい

る。

それで、いわゆる未開種族なんということをいわれておる人たちの健康状態というものを、もっと偏見を持たずに見るということが、私は必要だと思うんですね。だから、孤立した住民と、近代化された住民との間に、どういう差が急激にあらわれているかということですね。それが顕著にあらわれるのは、だれが見てもわかるのは歯ですね。その前にあらわれるのは何かというと食べ物ですよ、その違いはね。要するに伝統的な食事から、近代文明人の食事が入ったときにはこういうふうになっちゃう。それを40年もかかって調査したんだ。

身体的変形、それから胎児の栄養的欠陥、それは結局肉体とか、精神とか、あるいは道徳とかにまで関係してくるわけだな。それはまた、そこに住んでいる人たちの土壌との関係も出てくるし、気候風土にも関係してくるし、その政治、経済、あるいは文化的な生活様式とも関係してくる。もうそうになると、まさに世相そのものを包含した一つの目安として、顔形から、歯から——歯というのは一番かたいものだからね。焼いても残るんだものね。それが変わるぐらいなんだから、やわらかいところの組織は、変わるのあたりまえなんだね。そういうことで、私はこの問題は非常に重要だと思うんだね。

このことは石塚左玄の——きのう話したな、日本民族の食生活の問題、要するに食生活のインターナショナル化という問題ね。これはいい方向に向かえばいいけれども、悪い方に向かったら、おのずからその民族は没落していくね。ローマの文明だってそうよね。要するに、生活が非常に向上することによって、どんなことがその生

活におられれてくるか、肉体の力がだんだん低下して  
くるんです。

前田 先生がこれに接近されたというか……。

丸山 アーユルヴェーダ？

前田 入っていかれたのは、そういう延長線上に……。

丸山 だから、結局、いまの話の日本の医学がそういう  
方向に、民族が、あるいは世界の文明が進歩すると同時に、  
肉体的には退化していくという問題について、古代  
医学というものが、どういう考え方でつくり上げられた  
かということもあるね。西洋医学の方はもういいとして、  
東洋医学の方だと、いままでではとまるところは中国だ  
ね。ところが、日本人の精神生活の源流というのは、も  
ちろん日本神道だけれども、多くの人たちをつかんだの  
は仏教だね。仏教は中国から来たけれども、その源流と  
いうのはインドよ。

そうすると、人間の命の問題に関する学問というもの  
は、その社会における最高級の知識や、技術や、あるい  
はいろんな——要するに、どんな金持ちも死ぬし、どん  
な権力者も死ぬんだ。そうすると、最後のよりどころは、  
自分が長生きしたいことなんだ、自分が健康になりたい  
ことなんだ。そのために対する手だてというのは、カネ  
に糸目をつけないわけだ。それは、個人的な欲望である  
と同時に、民族的、社会的な欲望でもあるわけだ。

その社会が非常に文明が高度化すれば、その民衆の要  
求にこたえる技術というものが、その時代、そのときの  
最高級にいくわけ。そうすると、各古代文明における、  
その時代の最高級の医学というのは、どういうものであ  
るかということは、われわれは注目しなければならない。

ところが、もう壊滅してしまっただ古代文明の文献資料というのは、なかなかわからないわね。ところが、インドにはそれが脈々として続いているという事実を知ったわけなんだ。それはお釈迦さんの時代に、もうすでにインドの医学はでき上がっておったということね。ああ、おもしろいと、それで勉強し出した。それがアーユルヴェーダ。そして、それに目をつけるように注意をされたのが、やっぱり桜沢如一先生ですね。

西洋人ではエーダムあたりが、中国の留学生から、中国の医学というものが西洋の医学とは違うということがわかった。そして中国の医学を勉強していくに従って、中国文明というものを、西欧人は知らな過ぎるという自覚のもとに、仕事を始められたのが、「中国の科学技術史」ですね。

日本にせんだって来られたわね、3回目に来られたのが、国際科学技術史学会。われわれはその最初の第1回と第2回のお会いして、いろいろと討論したんだけど、そこで啓発されるところが非常に大きかったね。

ところが、そういう感覚を日本の医者は持っておらぬものね、このごろは持ち出したけれどもね。その当時は持っておらなかつた。だから、私がねらったことは間違いじゃなかつたという自信がいまあるわけだ。そして、このアーユルヴェーダにしても、まだ10年ですからね。

前田 これはまことに変な質問なんですけれども、このかな文字はどういう……？

丸山 サンスクリット語の「アーユルヴェーダ」というのは、「アーユル」というのは英語に訳せば「ライフ」、

エーダ」というのは「サイエンス」。「ライフ・サイエンス」と訳しているし、あるいは「サイエンス・オブ・ロンゲビティー」と訳してもいい。要するに「長寿の学問」でもいいですな。「マクロ・ビオティック」と訳してもいいだろうね。

いまいわれているライフ・サイエンスというのは、科学技術会議あたりでも問題になっているわね。私は、ライフ・サイエンスというのがここ20~30年だろうね、問題になったときに、単なる自然科学だけのライフ・サイエンスという西欧流の発想だけで、日本がそれに追随していくというのは、やはり全世界的に見ればあまり好ましいことではない。むしろこの際特徴的なのは、「アーユルヴェーダ」というものを考えに入れてほしいというのでやってきたんだけど、もう今度の答申案を見ると、アーユルヴェーダという言葉は出てないけれども、そういう思想がそこに盛られておるということを見つけて、やはり具眼の士はおるんだなという気がしますな。

外国人だって、アメリカあたりの学者でも、アーユルヴェーダはちゃんと知っておるものね。だから、中国の学問がニーダムによってあれだけ注目されて、英語に訳されていますけれども、インドの学問が訳されて紹介されているというのは、やはり文学とか、芸術とか、宗教とか、哲学とかいう方面は、訳されている、というか十分紹介されています。ところが、科学技術の方だと、天文学であるとか、数学であるとか、あるいは薬物であるとかいうようなことは、最近ぼつぼつ紹介されかけてきたのが日本の実情ではないかね。

前田 「医師は一般人より長生きするのか」、「医学校卒

業生名簿から死亡・生残表」をつくる。

丸山 それは統計的な問題になるね。こっちはもっと文化的なものだね。そういうことをだれにでもわかるような問題として提起しようと思ったら、そういうやり方の方に、要するに、医者には長生きするのかもしれないのか、医者というのとは一番そういうことをよく知っておるわけだから。知っておってもやらなければ、何にもならない。医者の不養生とか、紺屋の白ばかまというのがあった。しかし、医者については調べておく必要があると思って、医学校の卒業生名簿を調べたんだ。これが「医学校の卒業生名簿」。

前田 結局、これはどんな結論になったんですか。

丸山 結論とは……？よくみんなは、すぐ「結論はどうですか」とか、「あんたは何のためにそんなのをやっただんですか」と聞くね。それは聞いた人なり、あるいは見た人が、これは何に使えるかということは、その人の能力次第なんだから、われわれが考える以上にすばらしいことを考えておられるかもしれぬ。私は単に事実を、「こうなりました、私はここまでしかわかりませんが教えてください」と出しているんだけど、だれも教えてくれないわけだ。「こんなところでいいでしょうか」といって、やっているわけだ。これはだれでもできるね。この考え方というのは、私は非常に重要な考え方だと思う。

そのことは結局、老年対策の問題だとか、定年対策の問題だとか、労働力の問題だとか、それに関係してくるんだよ。それだから、いままで60歳以前に定年制を敷いているということは、やはり経験的に、実に上手に人間を使っているということだね。

前田 そうですか。

丸山 だって、それは危険負担を使用者側は負わなくていいもの。その前に切っちゃうんだからね。

そうすると、今度、日本の老人人口が多くなる、寿命が延びた、こういう言い方をしておるけれども、この問題について、それを安直に受け入れていいだろうかということは、私はまだ断言するところまではいかないし、それから、平均寿命がこれからもどんどん延びるだろうとは私は思わない。むしろ、ここら辺が頂上で、だんだん平均寿命が減ってくるんじゃないか。というのは、もういま平均寿命というより、この前いった長生きしてる人が多い。要するに死亡率というのは一番低いところが12、13、14、15歳ぐらいだろう。あれはどんどん下がらなければいけない。あとは上がるものなのよ。上がり方はどうだということを、どんなふうにコントロールできるかということだけなの。

そうすると、この問題は外国に移住した日本人の人たちの第1世、第2世、第3世ぐらいにもうなっているからね。第1世はピンとしているけれども、第2世、第3世の方が先にさよならしているわけだな。だから、田舎あたりに行くと、じいさん、ばあさんはシャンとしているけれども、中年層が危なくなっているということの本質的な問題はどこにあるかということ、やっぱり明らかにする必要はある。私たちは薄々こうであろうと思っていますけれどもね。

それは結局、平素の生活、その中の最も大事なものは食べ物。その食糧政策が日本では外国依存なものな、おかしいと思うんだけれどもね。だから、経済主義の方が先行しておって——経済というのは、その範囲では目的か

もしらぬけれども、純粹に人間生活については従属的な課題なんだよ。人間生活の主目的は何だといわれたら、経済生活じゃないはずにもかかわらず、いまの諸君は皆経済生活を主眼に置いて、いま一番大事なのはカネだ。カネがありさえすれば何でもできる。カネで買えないものは何だ、何でも買える。われわれはそれは手段であって、目的はそうじゃないと思うんだがね。

そうすると、やはりわれわれ生きてるということ、生きてることをどうするかということなんで、その手段としてはカネが必要だということはよくわかるけれどもね。だから、やはりボディー・マインド・ソウルとか、ボディー・マインド・スピリットということを考えてときに、われわれの体というものがどんなに大事であるかということ抜きに、精神問題や、魂の問題というのは論議できないだろう。

だけれども、今度はこれを裏返して見れば、そういうものの大事さを主張するということは、現在の生活の中においては、どういう意味を持つか、なかなか相手を理解させるのには、「人を見て法を説け」でな、わかってもらえるのには時間がかかるわ。それには、人に説明する必要もない、自分で実験して、みんなが実験してみても確かめてみるということの方が大事で、それが科学的な態度だと私は思うね。だれがいうたから、彼がいうたから、それを真に受けるなんというのは、自主性が最も欠けておることじゃないかな。

前田　ということで一応……。本当に長時間、3日にわたっていろいろ、しかもお忙しい中を申しわけございません。

丸山 まだ私には足らぬけれども、それは私の準備も不足しておるし、それから、言葉に出して話をするというのは、その雰囲気の問題なんだね。たまたま君のような相手が来たんだから、心置きなく話はできたけれども、質問されたもの以外は、答えていないからな。

前田 それは、私も不勉強でございましたけれども、ちよっとこれだけのものを、自分でもこなし切っていましたから。

丸山 私は、ことしは何とかして統計の問題だけでも整理しておきたいと思っていたんですけれども、それができなくて、この程度にしか-----。

前田 この程度どころじゃない。大変ありがとうございました。